甲府市文化財調査報告 1

山梨県甲府市

大　坪　遺　跡

十郎川河川改修工事に伴なう発掘調査報告書

1984

甲府市教育委員会

序

国鉄中央線沿いの十郎川河川改修工事と中央自動車教習所改修工事を機に、大坪遺跡発掘調査研究が多勢の人々の協力によって行なわれました。

発掘された遺物は、土師器の坏・皿・甕・高坏・鉢・壺・蓋のほかに、須恵器や瓦・木器・木製品等があります。土師器の大半は、皿と坏がしめ、「甲斐型」と呼ばれるものが多量に出土しています。中でも「甲斐国山梨郡表門」と刻書のある土師器皿の発見は、県下の大きな話題となりました。平安時代という本県最古の地名が刻まれたもので、学界に貴重な資料を提供すると同時にこの資料から派生する問題は、これからの課題でもあります。

これらの貴重な遺物をもとに、郷土山梨の昔の人々の生活習慣や自然環境、さらには当時の社会や国家の歩みの研究をすすめていくことは、現代の国家・社会をふりかえり理解していくのに、極めて大切だと思います。

この報告書が、広く活用されることを望んでやみません。

昭和59年２月

甲府市教育委員会

教育長　楠　　恵　明

例　　言

1．本書は、山梨県甲府市横根町字大橋に所在する埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2．本書は、昭和57年度、濁川河川改修事務所の協力を得て甲府市教育委員会が実施した十郎川改修工事及び教習所改修工事に伴う大坪遺跡の緊急発掘調査報告書である。
3．発掘調査は、昭和57年11月５日～12月６日まで行なった。報告書作成作業は、甲府土木事務所と甲府市教育委員会との委託契約により、昭和58年７月７日～昭和59年２月15日まで行なった。
4．本書の作成は、甲府市教育委員会が行なった。執筆は、植物遺体について市河三次先生。動物骨について小林君男先生にお願いした。上記以外は、信藤が執筆・編集に当った。
5．遺物整理及び実測等については、信藤・石井丈司・伊藤正幸・保坂典子・新津重子及び山梨県立女子短期大学考古学研究会・山梨大学考古学研究会の諸氏が行なった。
6．遺物及び実測図は、甲府市教育委員会が保管している。
7．発掘調査・報告書の作成にあたって次の諸氏及び機関から御教示・御協力を賜わった。厚く御礼申し上げます。

磯貝正義（県立考古博物館館長）、市河三次（県立女子短期大学教授）、小林君男（小林家畜病院院長）、末木健・八巻与志夫（県文化課）、田代孝・小野正文（県埋文センター）、萩原三雄・数野雅彦・畑大介（甲斐丘陵考古学研究会）、中込茂樹・宮川昌蔵（古代の山梨を知る会）、鎌田謙次郎外（濁川河川改修事務所）、塚原明生、佐野勝広、山梨県立埋蔵文化財センター、㈶元興寺文化財研究所、宏和建設、山梨県警察署鑑識課、（順不同・敬称略）。

調　査　組　織

（○印は整理のみ）

1．調査主体者　甲府市教育委員会
2．調査担当者　信藤祐仁（甲府市教育委員会）
3．調査指導　坂本美夫・保坂康夫・中山誠二（山梨県立埋蔵文化財センター）
4．調　査　員　伊藤正幸°（甲府市教育委員会）
5．調査補助員　保坂典子°・新津重子°
渡辺真帆°・茂木永子°・堤千穂°・中嶋優子°・鈴木ゆみ°・坂本真由美°
磯部佳世°・田草川茂美°・清水紀美子°・桜本千恵美°・金田あゆみ°・
川合洋子°・志村貫子°・相沢仁美°・菅谷加代子°・代永洋美°・島口郁子°
井出多加子°（山梨県立女子短期大学考古学研究会）
山浦甲蔵°・鈴木宏司°・小沢千恵美°・雨宮明美°・山本歩°・保坂牧°
大洞国子°（山梨大学考古学研究会）

本　文　目　次

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　発掘調査経過 …… 1

第Ⅲ章　遺跡の地理歴史的環境 …… 2

第Ⅳ章　旧河床地点

第1節　層序 …… 5

第2節　遺物の出土状態 …… 5

第3節　人工遺物

(1)　石器 …… 6

(2)　土師器 …… 6

(3)　須恵器 …… 30

(4)　瓦 …… 32

(5)　木製品 …… 34

第4節　自然遺物

(1)　植物遺体 …… 35

(2)　動物遺体 …… 36

第Ⅴ章　教習所地点

第1節　層序 …… 37

第2節　遺物の出土状態 …… 37

第3節　出土遺物 …… 38

第Ⅵ章　まとめ

第1節　出土遺物について …… 40

第2節　大坪遺跡の性格 …… 45

第3節　表門郷について …… 46

第4節　木製品について …… 47

参考文献 …… 48

挿　図　目　次

第１図　大坪遺跡の位置 …… 3
第２図　大坪遺跡発掘調査地点 …… 4
第３図　旧河床地点北面土層図 …… 5
第４図　旧河床地点出土石鏃 …… 5
第５図　土器実測図凡例 …… 6
第６図　旧河床地点下層出土土器(1) …… 7
第７図　旧河床地点下層出土土器(2) …… 8
第８図　旧河床地点出土坏(1) …… 13
第９図　旧河床地点出土坏(2) …… 14
第10図　旧河床地点出土坏(3) …… 15
第11図　旧河床地点出土坏(4) …… 16
第12図　旧河床地点出土皿(1) …… 20
第13図　旧河床地点出土皿(2) …… 21
第14図　旧河床地点出土皿(3) …… 22
第15図　旧河床地点出土皿(4) …… 23
第16図　旧河床地点出土皿(5) …… 24
第17図　旧河床地点出土蓋(1) …… 25
第18図　旧河床地点出土蓋(2) …… 26
第19図　旧河床地点出土土師器 …… 28
第20図　旧河床地点出土甕 …… 29
第21図　旧河床地点出土須恵器 …… 31
第22図　旧河床地点出土瓦 …… 33
第23図　旧河床地点出土木製品 …… 34
第24図　教習所地点土層図 …… 37
第25図　教習所地点出土土師器 …… 39
第26図　旧河床地点出土刻書土器 …… 42

表　目　次

第１表　旧河床地点下層出土甕・壺・高坏一覧表　9
第２表　旧河床地点出土坏一覧表(1) …… 10
第３表　旧河床地点出土坏一覧表(2) …… 11
第４表　旧河床地点出土坏一覧表(3) …… 12
第５表　旧河床地点出土皿一覧表(1) …… 17
第６表　旧河床地点出土皿一覧表(2) …… 18
第７表　旧河床地点出土皿一覧表(3) …… 19
第８表　旧河床地点出土蓋一覧表 …… 27
第９表　旧河床地点出土高坏・鉢・壺一覧表 …… 28
第10表　旧河床地点出土甕一覧表 …… 30
第11表　旧河床地点出土須恵器一覧表 …… 32
第12表　旧河床地点出土瓦一覧表 …… 32
第13表　旧河床地点出土植物遺体一覧表 …… 36
第14表　教習所地点出土土器一覧表 …… 40

図　版　目　次

図版１　旧河床地点全景等
図版２　教習所地点遺物出土状況等
図版３　遺物出土状態
図版４　旧河床地点下層出土遺物
図版５　旧河床地点出土坏(1)
図版６　旧河床地点出土坏(2)
図版７　旧河床地点出土須恵器及び土師器皿
図版８　旧河床地点出土土師器
図版９　旧河床地点出土墨書・刻書・刻線等
図版10　暗文のいろいろ
図版11　教習所地点出土坏
図版12　出土遺物等
図版13　旧河床地点出土木製品
図版14　旧河床地点出土獣骨等
図版15　大坪遺跡出土植物遺体(1) 木材と種子
図版16　大坪遺跡出土植物遺体(2) 木材の顕微鏡像

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

昭和50年３月初め、国鉄中央本線沿いに新設された国道140号線改良工事現場において多量の土師器が出土したことによって、大坪遺跡は発見された。山梨県遺跡調査団では、国道140号線改良工事及びこれと旧国道20号線を結ぶ新道の建設工事に伴なう発掘調査を実施した。調査は昭和50年３月に実施され、溝状遺構・土師器集積遺構及び焼土を検出し、これら諸遺構に伴なって平安時代を中心とする多量の土師器が出土している。

昭和57年10月、十郎川河川改修工事に伴なう中央自動車教習所の改修工事現場において多量の土師器が出土しているのを、古代の山梨を知る会の会員が発見した。この知らせを受けた甲府市教育委員会と山梨県教育委員会は、ただちに現地へ直行した。現地は、敷地内に下水管埋設用の溝が縦横に掘られており、この断面に土師器の露呈している所が数個所にみられた。県及び市教委では調査の必要性を痛感し、濁川河川改修事務所・宏和建設と発掘調査及び現場の工事内容等について協議を行なった。工事のための掘削は現状で終了とのことなので、現在露呈する土師器の集中部分を中心に甲府市教育委員会で発掘調査を実施することとなった。

第Ⅱ章　発　掘　調　査　経　過

教習所地点の発掘調査は、昭和57年11月５日より開始する。遺物が集中している地点の清掃と写真撮影を行なったのち、土層セクション図と遺物の平面図を作成する。比較のため他地点の土層を検討し柱状図を作成、11月12日をもって教習所内地点の作業を終了する。

11月12日、遺跡内の調査区周辺の踏査中、十郎川河川改修工事現場に多量の土師器が散乱しているのを発見する。11月15日、再度打合せの結果、河川改修工事は一時ストップして、濁川河川改修事務所の協力を得て発掘調査を実施することとなる。この調査も、甲府市教育委員会が中心となり、山梨県文化財センター職員がこれに協力することによって、11月16日発掘調査に入った。

調査は、清掃後現状写真を撮影し、掘り下げはじめる。遺物は平面分布図を作成しながらレベルを計測し、取り上げながら掘り進めた。作業が大部分終了に近づいた11月29日夜から30日朝にかけての豪雨よって調査区の大半が流失してしまった。一部残された遺物を取り上げ、層位の記録と土壌サンプリングをして、12月６日全発掘作業を終了した。

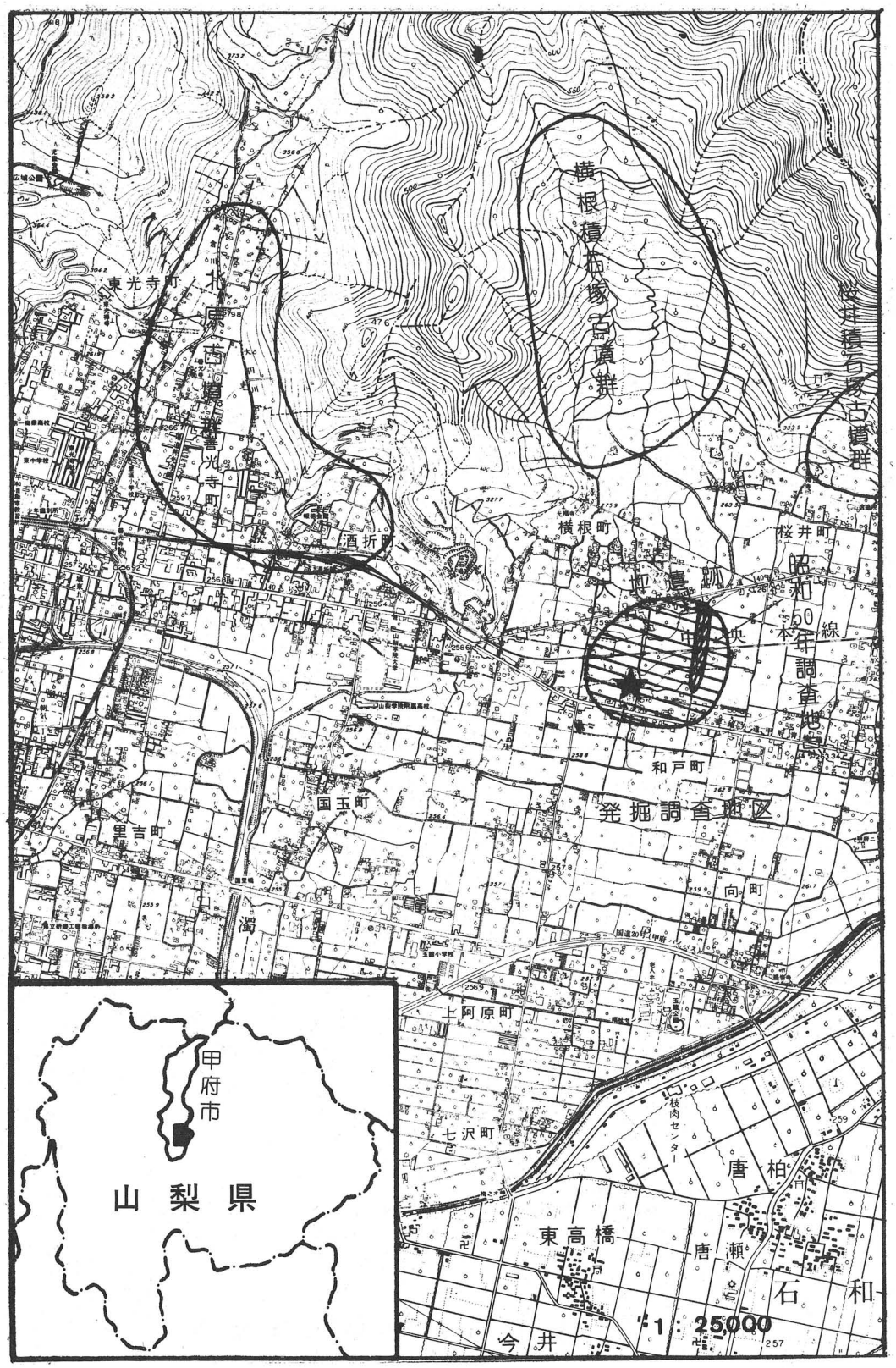
第III章　遺跡の地理歴史的環境

甲府盆地の北側に存在する関東山地は、2500m級の山波が続く山裾の深い山地である。これらの尾根をつなぐ稜線は、甲州・信州・武州のそれぞれ境界をなし、主峰金峰山（2595m）は、南を山梨県甲府市、北を長野県川上村に分けている。

この関東山地の最も古い地層は、中世代白亜紀の粘板岩、粘板砂岩であり、野猿谷付近に分布している。次に黒平から金峰山にかけてと、御岳昇仙峡付近に黒雲母花崗岩が分布している。特別名勝に指定されている御岳昇仙峡のあの奇岩怪岩は、この花崗岩の風化や水の浸食によって形造られたものである。この黒雲母花崗岩は、白亜紀から、古第三紀にわたっての造山運動に伴って形成された深成岩である。関東山地が甲府盆地と境をなす片山から湯村山、愛宕山、大蔵経寺山と続く付近の山々の基盤は、新第三紀鮮新世に、水ガ森山などの火山活動によって形成された輝石安山岩である。これらの基盤を持つ山々から流出してきた沖積層上に、大坪遺跡は存在する。

関東山地に源流を持ち、甲府盆地を南流する河川は、昇仙峡を形成する荒川、東の笛吹川、西の塩川が著名である。これらに注ぎこむ小河川は、山地から平地に移る所に扇状地を発達させている。太良峠に源を発する相川は、武田氏館跡が立地する相川扇状地を、高倉川は、東光寺町、善光寺町に、高倉川扇状地を形成している。本遺跡を貫流する十郎川は、八人山（570m）と大蔵経寺山（715.6m）の間の沢を南流する。水源から三ツ石の開拓集落を経て横根の集落までは、大山沢川と呼称されており、本遺跡のやや上流で十郎川と名称を変える。この形成された扇状地の扇端から盆地底部に移り、流れを西に変えて高倉川、大円川と合流して濁川となり、さらに南流して笛吹川に注いでいる。

昭和58年1月から3月にかけて、甲府市教育委員会は、山梨県考古学協会に委託をして横根、桜井地区の積石塚の分布調査を実施した。この結果、横根地区で八人山支群の新発見も含め116基、桜井側で26基の積石塚が確認された。この横根積石塚群は、大山沢川の形成する扇状地の扇頂部から扇央部にかけて分布を示す。この分布調査の副産物として、積石塚のある一帯には、縄文時代中期の遺跡が数個所発見され、積石塚が築造される以前にも人間の生活の舞台となっていた事もわかった。又、平安時代の遺物散布地もあり、大坪遺跡などの盆地底部の遺跡とは異なった生産基盤を持つ遺跡の存在も留意されるところである。甲府盆地の周辺では、山地から平地に変わる扇状地や台地上に、縄文時代の遺跡が濃密に分布しており、わずかに盆地中央部にも河川の自然堤防上に、数個所の遺跡が確認されている。弥生時代後期以後になると、遺跡のほとんどが河川の自然堤防上などの盆地内の微高地に限定されるようになる。このような遺跡立地は、経済基盤が猪や鹿などの狩猟や木の実、芋類の採集段階から、水稲栽培による農耕文化に移行したことを如実に物語っている。西側の高倉川

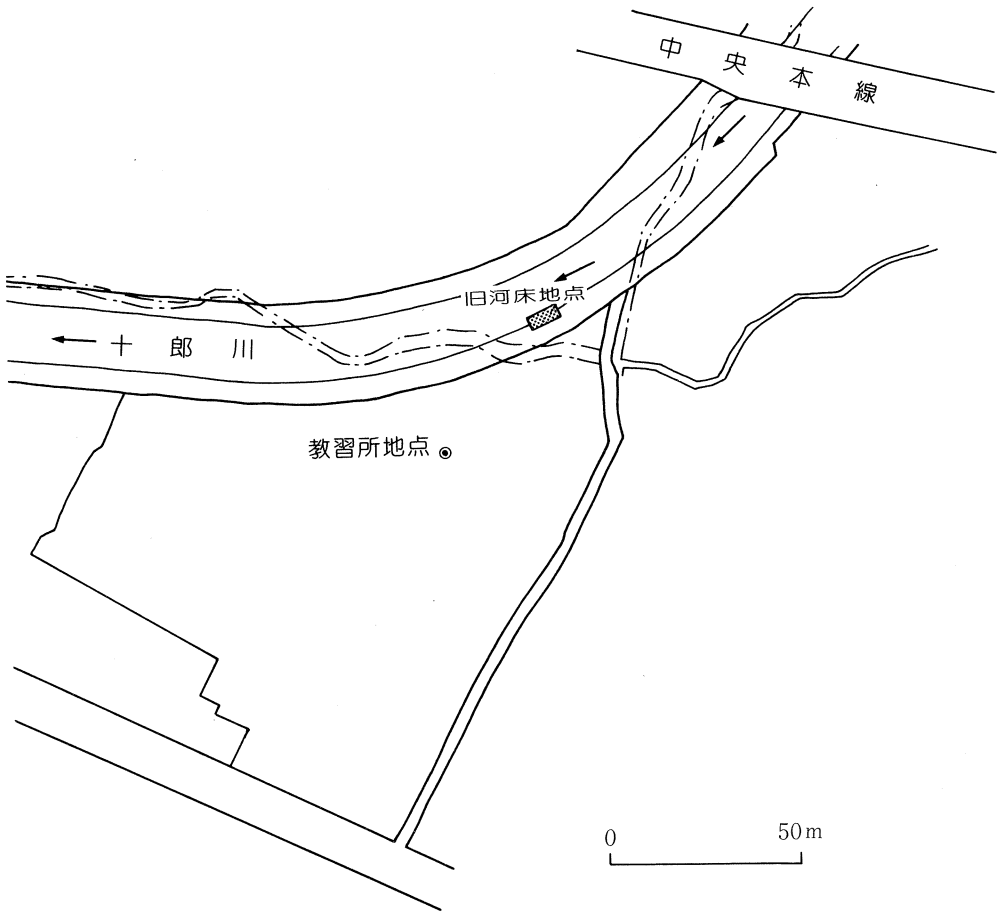


第１図　大坪遺跡の位置と周辺の遺跡

扇状地には北原古墳群が存在し、横根・桜井の積石塚古墳群やその大部分が消滅してしまった和戸の古墳群などと共に、本遺跡の周囲は、山梨県内でも古墳の集中する地域である。

本遺跡東方約700mは、白鳳～奈良時代にかけての瓦が焼かれた川田瓦窯址がある。良質の粘土を産するところから、古代より土器が焼かれており、瓦製造は昭和初期をピークに現在でも営まれている。付近には、古社として、町名にもなっている酒折宮、国玉（玉諸）神社が存在する。酒折宮は、「古事記」、「日本書紀」に記載されている日本武尊東征の帰途に立ち寄った所とされる。日本武尊と火焼きの老人との問答は、連歌の始めであるとし、連歌発祥の地としても有名である。玉諸神社は、「延喜式」神名帳記載の古社であるといわれ、中世には甲斐国三宮と称した。酒折宮、玉諸神社ともに、古くは裏山の御室山中に存在した。

甲府市域は、平安時代に青沼郷と表門郷とに分かれ、本遺跡をはじめとする東側一帯は表門郷にあたる。現在本遺跡の北側には、国鉄中央線が通っており、国道140線と旧国道20号線に挟まれた一帯がほぼ本遺跡の範囲である。

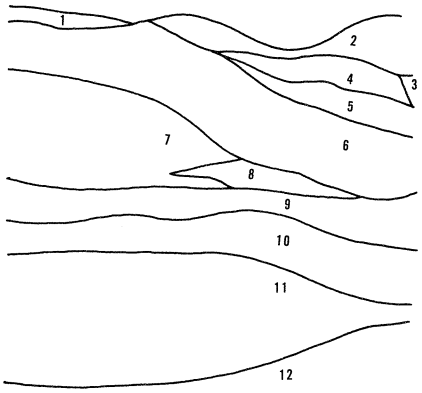


第２図　大坪遺跡発掘調査地点

第Ⅳ章　旧　河　床　地　点

第１節　層　　序

本地点は、発掘調査開始時点で工事による削平が終了していたこと、調査途中で調査区の大半が流失してしまったことにより、東側一部の記録がとれたにすぎない。この部分は旧河道のほぼ中央部の横断面である。第１層暗茶褐色土層、第２層暗灰色シルト層、第３層暗灰色砂層、第４層暗灰色砂層、第５層灰色粘質土層、第６層暗灰色砂層、第７層暗灰褐色砂層、第８層暗灰色粘土層、第９層灰褐色砂層、第10層黒色粘土層、第11層暗灰色砂質土層、第12層緑灰色砂層と以上のように分層された。



第３図　旧河床地点北面土層図

第１・２層では、植物の根のまわりに付着した鉄分の酸化した黄褐色の縞が縦に何本も見られる。第４層から第８層までは、粘土質の土層と砂質の土層の互層であり、流木をも含んでいる。第９層は、奈良時代から平安時代前半の遺物の包含層である。灰褐色の砂層であるが、植物の葉などの腐食した黒褐色の土層も部分的にみられた。第９層は、遺物の包含はほとんどない粘土層である。第10・11層は、緑灰褐色の砂層であり、第10層は粒子が細かく第11層は荒い。両層中には、古墳時代前期・後期を通しての遺物が木材などとともに包含されている。

第２節　遺物の出土状態

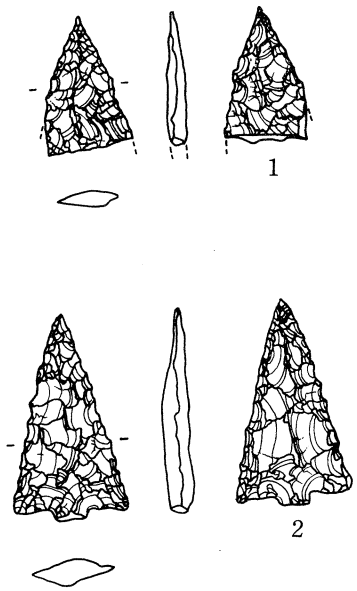
遺物は、旧河道の底部と思われる河床からの出土である。奈良・平安時代の遺物の検出された第９層は、比較的上位に馬の下顎骨などの動物遺体や木製品・種子・材などの植物遺体がみられ、下位に土師器や須恵器などが位置していた。これは、旧河道中の流れが比較的緩やかでよどんだ状態にあった所へ、遺物が棄てられたものと思われる。時代幅があり多種類の遺物がみられることから不規則な投棄であったにもかかわらず、比重の軽い動・植物遺体が上位にきたのであろう。

遺物の分布は、河床部分の幅６ｍの範囲に限られ、調査区対岸の削平された土層断面中にも量は少ないものの同様の遺物が含まれていた。第11・12層では、古墳時代前期の五領期から、古墳時代後期の鬼高期の土師器片と炭化の進行途中の材が、砂層中に散漫に分布していた。石鏃は２点とも、掘削の終了している新十郎川の河床の流水中よりの採集品である。

第３節　人工遺物

(1)　石　器

本調査で確認された最古の遺物で、縄文時代の石鏃である。２点とも旧河床地点の中の工事によって掘削の終わっていた河川流路上に存在していたものである。１は先端部茶色で胴部灰色のチャート製の石鏃で基部以下の脚部を欠損している。非常に鋭利な先端部をもち、有刺鏃状に刃部の剝離が行なわれている。現存長18㎜・厚さ２㎜と薄手の作りである。２は、灰色チャート製の平基有茎石鏃である。茎部の先は一部欠損しているもののほぼ原形を窺える遺物である。現存長28㎜・幅16㎜・厚さ３.5㎜を計り、きれいなシンメトリー形をしている。断面形はレンズ状をなし、刃部はていねいに剝離され有刺鏃状になっている。他にこの石鏃に伴なうような時期の遺物がみられない点と遺物の出土状態からこの２点の石鏃は、十郎川上流の大山沢川沿岸の遺跡から流されてきたものである可能性が高い。



第４図　旧河床地点出土石鏃

(2)　土師器

土師器には、坏・皿・蓋・甕・鉢・高坏・壺等があり多種にわたっている。旧河床地点の下層からは、甕・壺・高坏・坏が出土している。甕は、写真図版４に示したＳ字状口縁のものや６図１のものは、ともに五領期の台付甕の口縁部破片である。高坏は、坏部に稜がみられ、脚部は丈の高いものと低いものの２者があり、裾部で大きく開く形をとるものと漏斗状のものがある。坏は、口縁部端で小さく屈曲する丸底のもの（７図15～17）、単純な丸底のもの（７図20～24）、外面に稜をもつもの（７図19）がある。これは、内外面ともに赤彩が施されている。

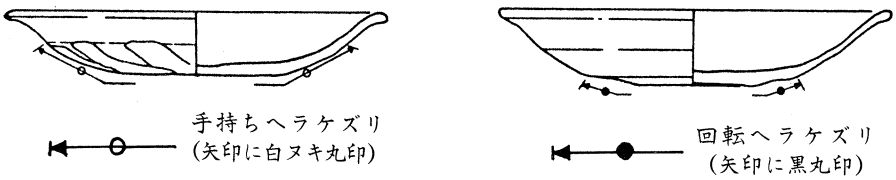
上層（９層）出土の土師器は以下のように分類される。

坏１類　底径が大きく暗文のないもの（８図１～10）

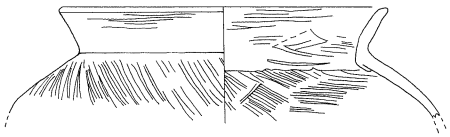
坏２類　底径大きく、みこみ部にも暗文のあるもの（10図28・31・34・36・39、11図42）

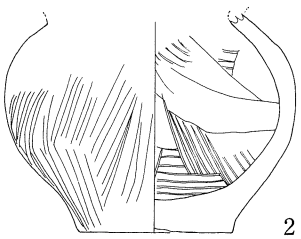
坏３類　底径大きく、深めでみこみ部にも暗文のあるもの（８図11～13、９図、10図29）

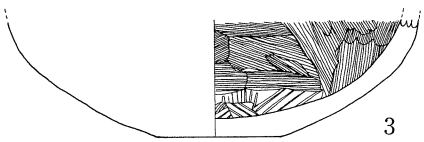
坏４類　底径が小さく体部のみ暗文のあるもの（10図21～27・30・32・33・35・37・38）
（11図40・41・43～48）

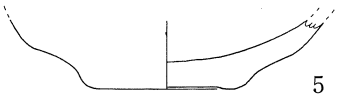


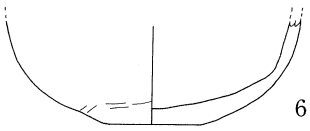
第５図　土器実測図凡例

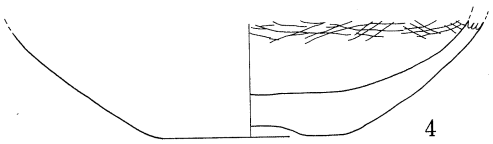

1

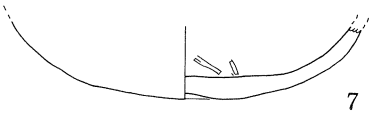

2

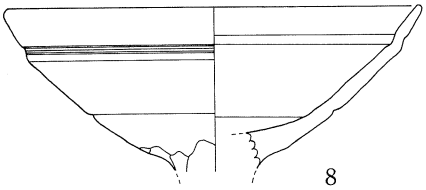

3

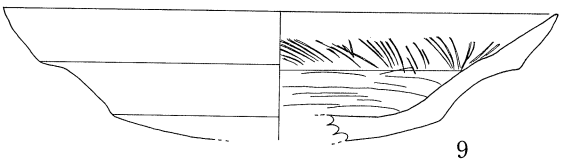

5

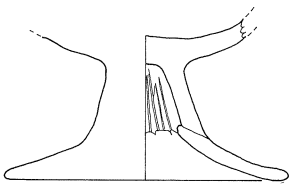

6

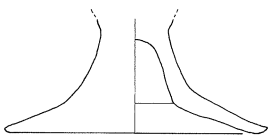

4

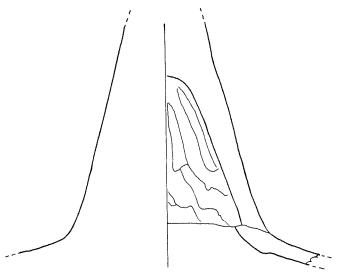

7

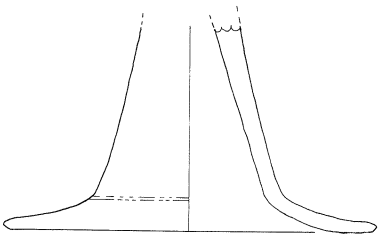

8


9


10


11


12


13

第６図　旧河床地点下層出土土器(1) 1/3

坏５類　底径が小さく暗文のないもの（11図49～58）

皿１類　渦巻状暗文をもつもの（12図１～３・６・７、13図、14図、15図23・24、16図32～34・37～41・43～47・49～51）

皿２類　放射状暗文をもつもの（15図25～30）

皿３類　暗文をもたないもの（12図４・５、16図31・35・36・42・48・52、26図）

蓋１類　擬宝珠形つまみを有するもの（17図１・２・８、18図９～16）

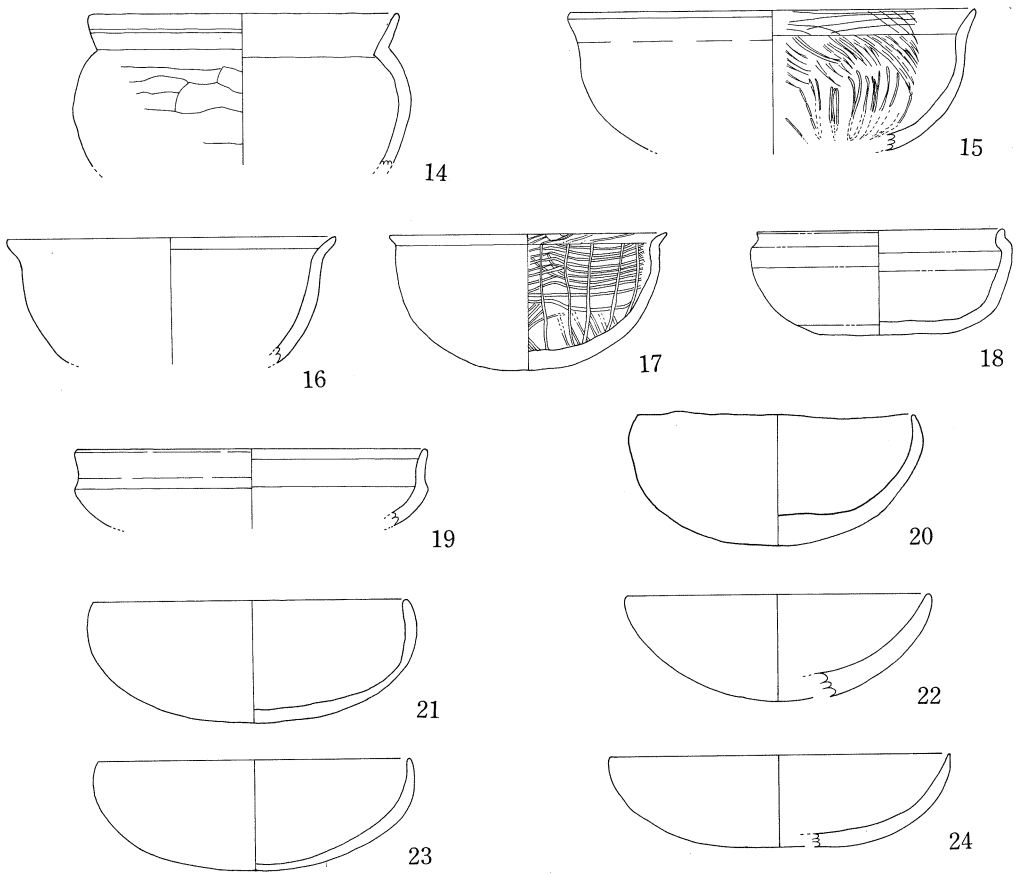
蓋２類　高台形つまみを有するもの（18図19～21）

蓋３類　つまみの不明なもの（17図３～７、18図17・18）

甕１類　輪積み成形のもの（20図１～５・７・９・10）

甕２類　ロクロ成形のもの（20図６・８）

以上の他に、19図に示した単品出土のものがある。１は、四角形の透し窓が入り上下の径差が少なくヘラ削りが明瞭で精緻な胎土をもつ特殊なものである。２は、口縁部内面にスス・タールが付着しており、燈明皿として使用されたものである。３は手捏ね土器で、成形時のヒビ、指頭圧痕が明瞭に残る。４は薄手に造られた鉢で、ロクロ成形され糸切り後手持ちのヘラケズリが底部に施されている。５は、ロクロ成形後体部下半にヘラケズリが施されており、上部は横位のヘラミガキがされている。



第７図　旧河床地点下層出土土器(2) 1/3

第１表　旧河床地点下層出土甕・壺・高坏一覧表

※法量の数字は、口径・底径・高さを表わし、（　）は推定値を示す。単位cm。

番号	器種	法　量	整　形　技　法	残存率	備　　考
1	甕	(12.8)	内面・外面ともにハケメ 口縁部はナデ調整		頸部に炭化物付着
2	壺	6.1	内面・外面ともに粗いハケメ	80%	胎土に雲母・花崗岩・安山岩の砂粒を含む
3	壺	5.0	内面底部に粗い左回り方向のハケメ 内面胴部には細かい右回り方向のハケメ		胎土良質・焼成良好
4	壺	7.5	内外面ともにハケメ		モミの圧痕あり 内面底部に焼成時の亀裂あり
5	壺	6.0			胎土に長石・石英等の砂粒含むも焼成良好
6	壺？	3.6	外面にヘラケズリ		胎土緻密にして焼成良好
7	？		外面底部ヘラケズリ		上げ底風なるも丸底である
8	高坏	(16.4)	脚部と坏部の接合部分にヘラケズリ	20%	
9	高坏	(22.0)	坏部の下の稜より下ヘラケズリ 内面に一部ハケメが残る	20%	内面中央付近は暗文風にミガキがされている
10	高坏	11.2	脚部つけ根にハケメが一部残る 脚部上半はヘラケズリ	50%	
11	高坏	10.6	表面は放射状にナデ、内面は横ナデ	50%	内面に焼成後のキズがケズリの痕跡状に見られる
12	高坏		脚部上半と下半を接合させる 外面は縦のヘラケズリ内面はオサエ	30%	焼成良好
13	高坏	(14.4)	ケズリの後、放射状のミガキ 内面はナデ	30%	焼成良好
14	壺	(12.8)	胴部横位のヘラケズリ 口縁部及び内面は横ナデ		口縁部に沈線
15		(16.0)	胴部横位のヘラケズリの痕跡 内面にハケメ		内面下半に暗文風のミガキ
16	碗	(12.1)	胴部にヘラケズリの痕跡		焼成良好
17	碗	(11.0)	底部付近にヘラケズリの痕跡 内面にハケメ	55%	放射状暗文風ミガキ
18		10.3 4.1	ロクロ成形	70%	内外面ともタール状の炭化物が付着している
19	坏	(13.8)			内面赤色塗彩
20	坏	10.2 5.2	ナデによる整形も形がいびつ	95%	焼成良好
21	坏	(11.8) 4.9	ヘラケズリ後ナデ	40%	内面ミガキの痕跡
22	坏	(12.0)		20%	不規則なミガキ状の沈線
23	坏	(14.4)	ロクロ成形後、横位ヘラケズリ	30%	焼成良好
24	坏	(13.4) 3.7	ヘラケズリの痕跡	20%	焼成良好

第2表　旧河床地点出土坏一覧表(1)

※法量の数字は、口径・底径・高さを表わし、（　）は推定値を示す。単位cm。

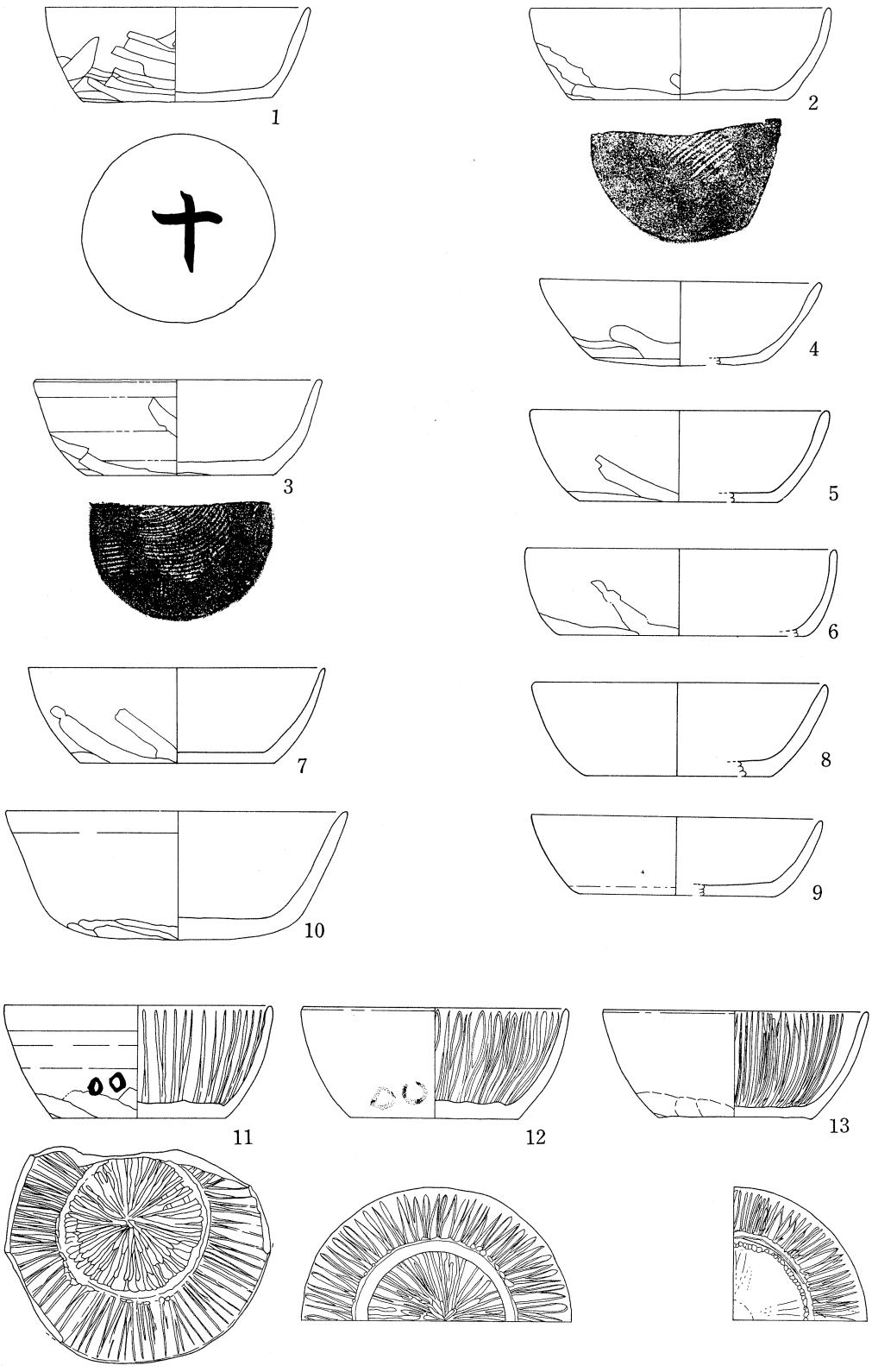
番号	器種	法量	整形技法	残存率	備考
1	坏	12.1 8.5 4.3	底部・体部下半手持ちヘラケズリ	100%	底部・墨書「十」
2	坏	(13.8) (10.0) 5.2	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	35%	ロクロ右回転
3	坏	13.2 8.5 4.4	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	65%	内面炭化物付着
4	坏	(13.1) (8.0) (3.6)	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	20%	
5	坏	(13.5) (9.1) (4.2)	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	35%	
6	坏	(11.4) (4.2) (4.0)	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	20%	
7	坏	13.1 8.9 4.4	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	90%	
8	坏	(13.6) (8.6) 4.3	体部下半手持ちヘラケズリ	20%	
9	坏	(13.4) (9.0) 3.6	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	25%	
10	坏	(15.8) 5.9	底部・外縁横位のヘラケズリ 体部外縦位・内横位のミガキ	35%	みこみ部放射状暗文風 幅広のミガキ
11	坏	(12.4) 8.0 5.2	体部下半手持ちヘラケズリ後ミガキ 底部ヘラケズリ後ミガキ	60%	体部下半・墨書「○○」 みこみ部にも放射状暗文
12	坏	12.2 7.6 5.1	体部下半手持ちヘラケズリ後ミガキ 底部ヘラケズリ後ミガキ	100%	体部下半・墨書「○○」 みこみ部にも放射状暗文
13	坏	12.1 7.0 4.9	体部下半手持ちヘラケズリ後ミガキ 底部ヘラケズリ後ミガキ	95%	みこみ部にも放射状暗文
14	坏	(12.3) 7.5 5.2	体部下半手持ちヘラケズリ後ミガキ 底部ヘラケズリ後ミガキ	60%	みこみ部にも放射状暗文
15	坏	5.6	底部糸切り後ヘラケズリ		底部墨書「生」 みこみ部にも放射状暗文
16	坏	13.1 8.8 5.9	体部下半手持ちヘラケズリ後ミガキ 底部糸切り後ヘラケズリ・ミガキ	65%	みこみ部にも密な放射状暗文
17	坏	13.5 6.0 5.1	体部下半左傾の手持ちヘラケズリ 糸切り後ヘラケズリ	70%	みこみ部放射状暗文、体部は交差する放射状暗文、内黒
18	坏	16.2 8.7 7.0	体部縦位後横位のミガキ 底部回転ヘラケズリ後ミガキ・削り出し高台	85%	みこみ部にも放射状暗文 焼成良好
19	坏	8.1	体部回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ後ミガキ・削り出し高台	30%	みこみ部螺旋状暗文、体部部放射状暗文、内黒
20	坏	(11.2)	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ・削り出し高台		みこみ部にも放射状暗文

第3表　旧河床地点出土坏一覧表 (2)

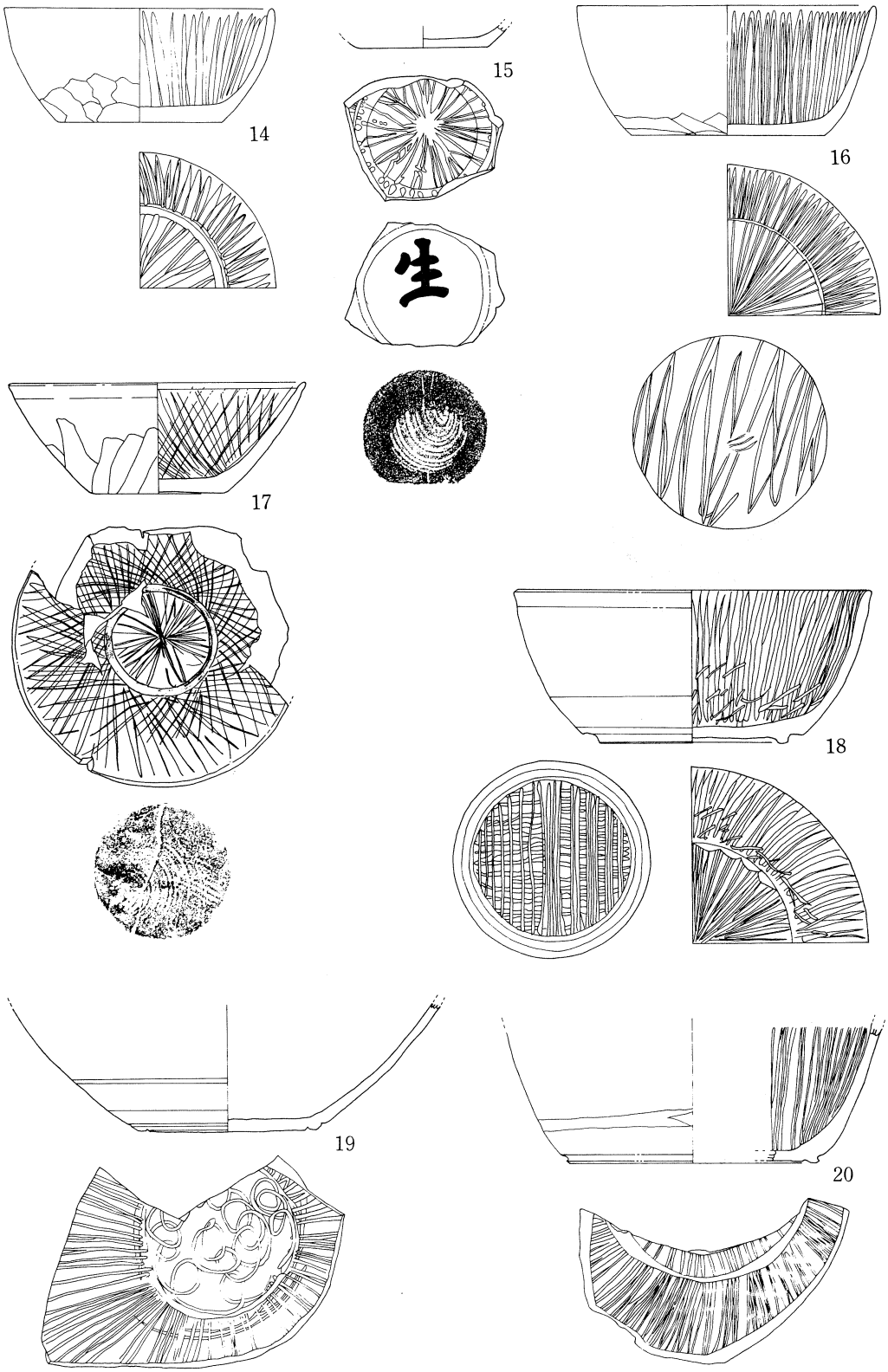
番号	器種	法量	整形技法	残存率	備考
21	坏	11.2 5.7 4.7	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	70%	放射状暗文
22	坏	(11.0) 5.5 4.5	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	45%	斜ジグザグ暗文
23	坏	11.5 5.4 4.2	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	55%	花弁状暗文
24	坏	11.2 4.6 3.9	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	80%	放射状暗文
25	坏	11.3 4.7 4.1	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	60%	放射状暗文
26	坏	(10.4) (4.2) 4.0	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	30%	放射状暗文
27	坏	(11.6) 4.8 4.1	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	50%	放射状暗文
28	坏	(11.5) (6.6) 4.1	体部下半手持ちヘラケズリ	40%	放射状暗文 みこみ部にも放射状暗文
29	坏	(14.2) (6.8) 5.7	体部下半手持ちヘラケズリ	25%	放射状暗文 みこみ部外縁に円形暗文
30	坏	(11.0) (5.4) 4.0	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	25%	放射状暗文
31	坏	(14.0) (6.8) 4.5	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	30%	放射状暗文 みこみ部外縁に円形暗文
32	坏	(10.3) 3.9 4.2	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	30%	放射状暗文
33	坏	(12.9) (5.0) 5.3	体部下半手持ちヘラケズリ	20%	一点集中型放射状暗文
34	坏	(12.1) (8.1) 4.9	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	30%	みこみ部にも放射状暗文
35	坏	(11.2) 4.6 4.0	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	40%	放射状暗文
36	坏	(12.8)	体部下半手持ちヘラケズリ 体部上半ヘラミガキ	15%	放射状暗文、外面スス付着 みこみ部外縁に円形暗文
37	坏	(10.2) 5.0 2.5	体部3／4手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	50%	放射状暗文
38	坏	11.3 5.2 4.0	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	70%	放射状暗文
39	坏	(11.7) 7.0 4.5	体部下端手持ちヘラケズリ 体部底部とも全面ヘラミガキ	45%	みこみ部にも放射状暗文
40	坏	11.3 5.0 4.0	体部下半回転ヘラケズリ 底部糸切り後回転ヘラケズリ	75%	花弁状暗文

第4表　旧河床地点出土坏一覧表(3)

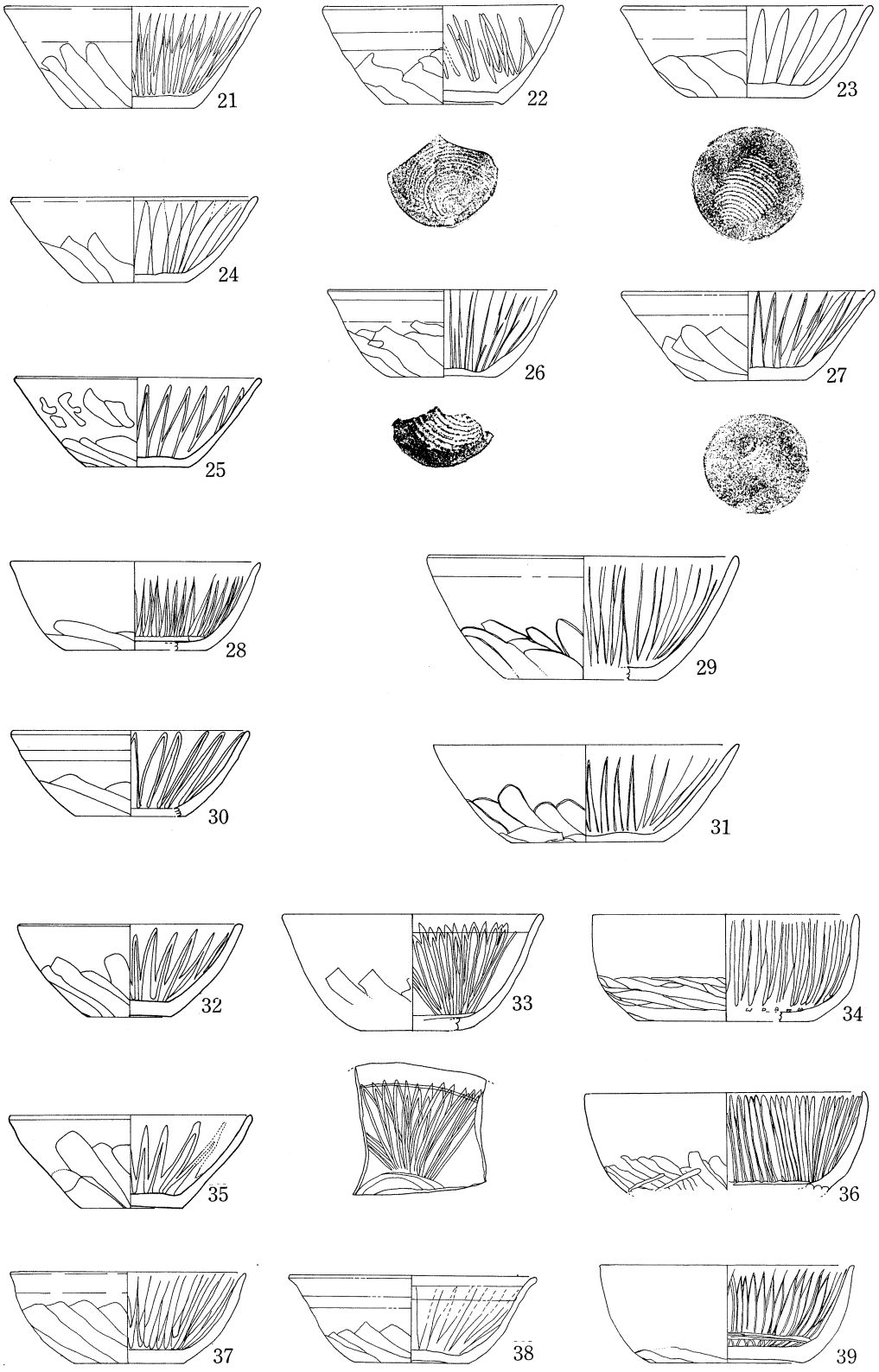
番号	器種	法量	整形技法	残存率	備考
41	坏	(11.3) (6.5) 3.9	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	20%	放射状暗文
42	坏	(11.3) (7.4) 4.4	体部に一部ミガキ	20%	みこみ部にも放射状暗文
43	坏	(14.2) (9.2) 5.5	体部下端手持ちヘラケズリ後ミガキ	20%	放射状暗文
44	坏	(13.4) (4.8) 5.6	底部ヘラケズリ	35%	放射状暗文 両面体部下半表面が剝離
45	坏	(6.9)	体部回転ヘラケズリ 底部糸切り、削り出し高台		放射状暗文
46	坏	(12.9)	体部ミガキ	15%	放射状暗文
47	坏	(13.2) (3.9) 5.0	体部下端回転ヘラケズリ 削り出し高台	25%	花弁状暗文、底部いびつ
48	坏	(14.1)		20%	特殊暗文
49	坏	(11.5) (5.7) 4.4	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	40%	口唇部に布の圧痕
50	坏	(11.2)	体部下半手持ちヘラケズリ	40%	
51	坏	(12.9) 6.0 4.8	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	40%	内面は平滑にミガキ
52	坏	11.8 4.2 3.7	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	80%	
53	坏	(12.2) 6.4 4.6	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り	35%	内黒
54	坏	(18.8) 6.5 6.5	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	30%	内黒
55	坏	(22.6)	体部下半回転ヘラケズリ 内面ミガキ		内黒
56	坏	10.0	体部下半回転ヘラケズリ 削り出し高台		内黒
57	坏	8.0	体部下端回転ヘラケズリ 削り出し高台		内黒
58	坏	(11.6)			内面下半に漆付着 （スクリーントーン表示）



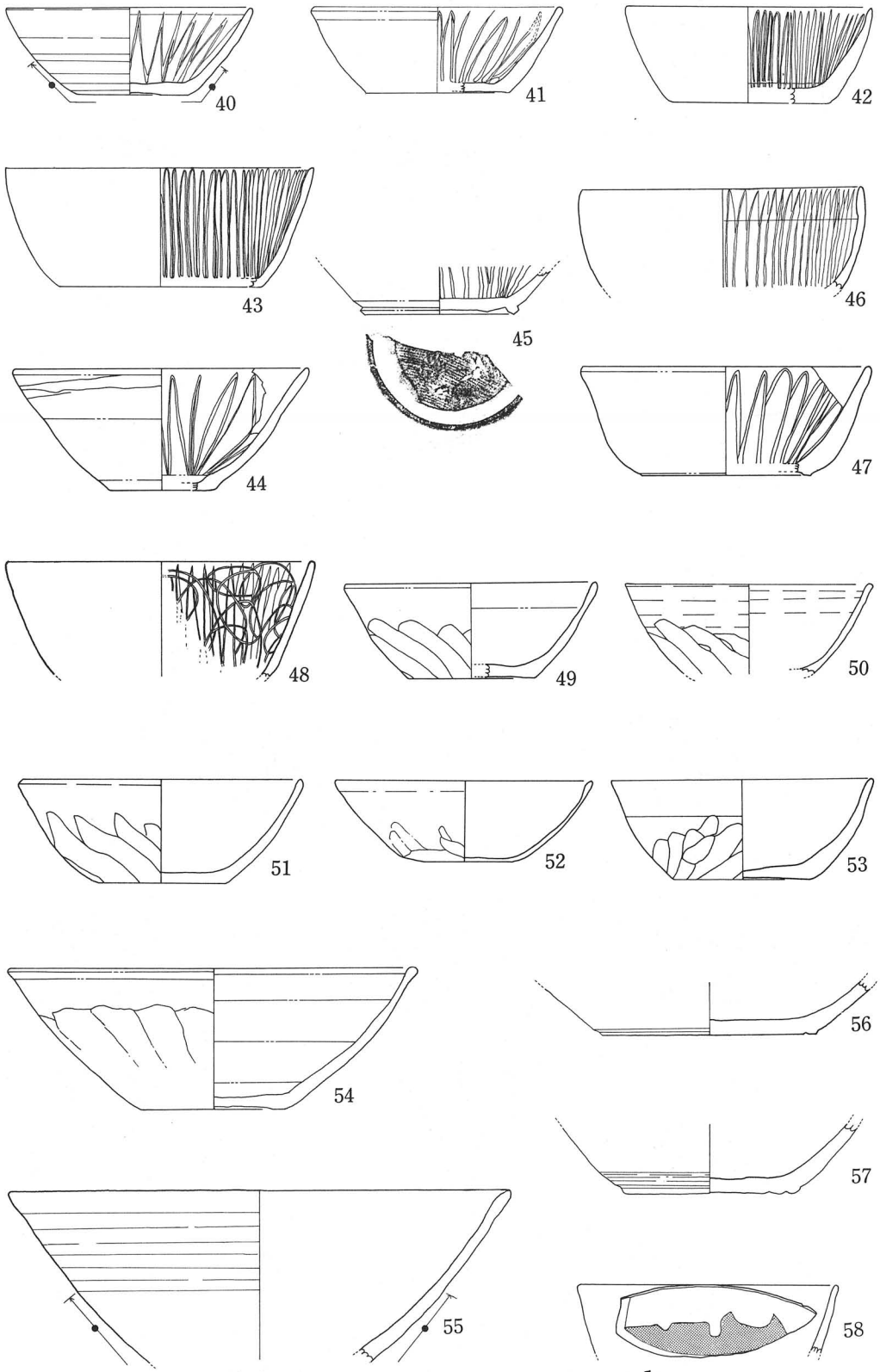
第８図　旧河床地点出土坏(1)　1/3



第９図　旧河床地点出土坏(2)　1/3



第10図　旧河床地点出土坏(3)　1/3



第11図　旧河床地点出土坏(4) 1/3

第5表　旧河床地点出土皿一覧表(1)

※法量の数字は、口径・底径・高さを表わし、（　）は推定値を示す。単位cm。

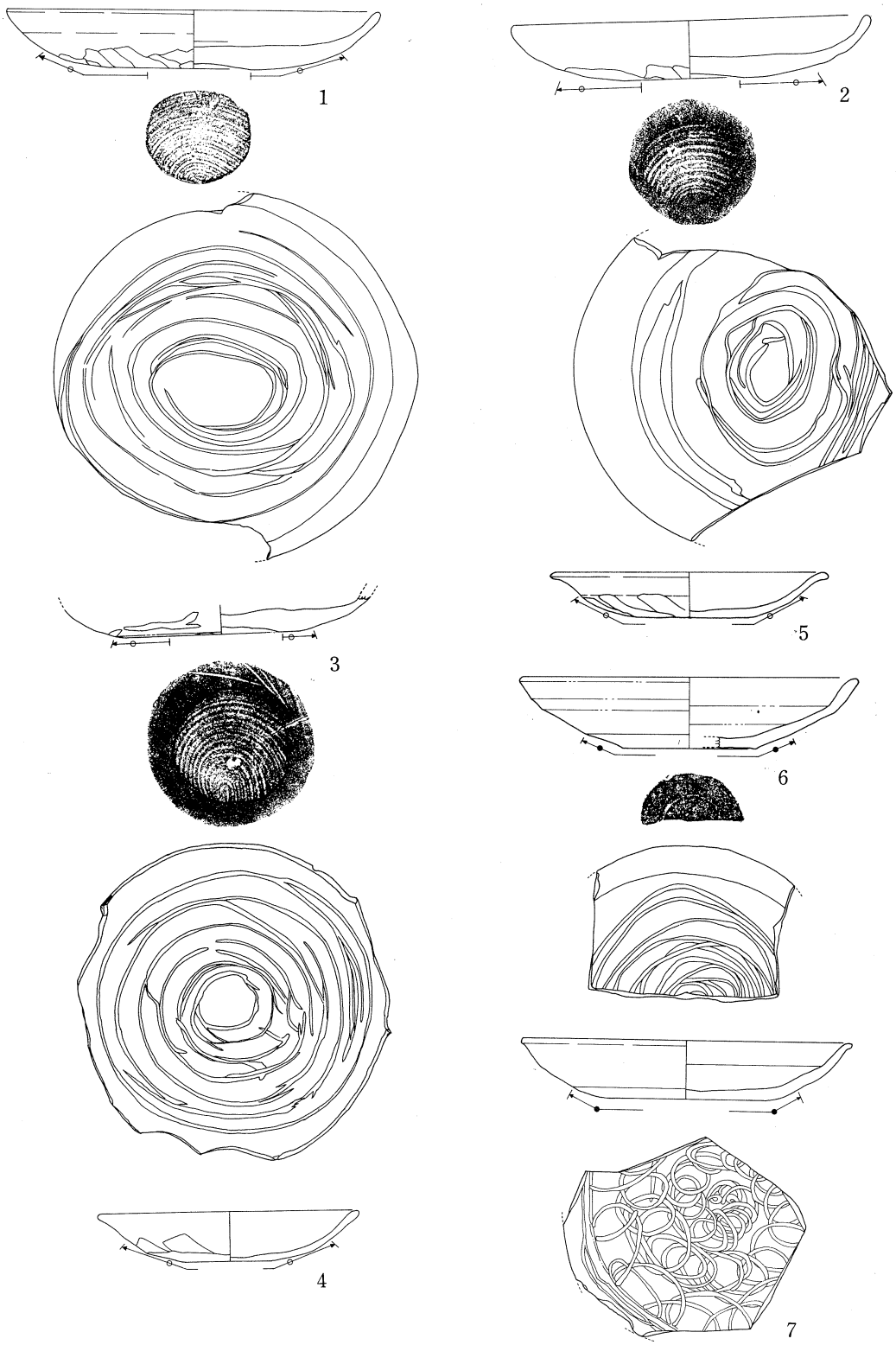
番号	器種	法量	整形技法	残存率	備考
1	皿	17.1 7.0 2.7	糸切り後手持ちヘラケズリ	85%	渦巻状暗文
2	皿	(16.3) 6.6 2.6	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	60%	渦巻状暗文
3	皿	8.0	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ		渦巻状暗文
4	皿	(12.2) 2.1	底部から体部下半にかけ手持ちヘラケズリ	40%	暗文なし
5	皿	(12.6) (5.0) 2.0	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	30%	暗文なし
6	皿	(15.6) 4.2 3.2	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	40%	渦巻状暗文
7	皿	(15.1) 7.3 2.7	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	50%	特殊渦巻状暗文
8	皿	(16.2) 5.3 2.9	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	70%	渦巻状暗文
9	皿	(15.6) (5.0) 2.8	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	25%	渦巻状暗文
10	皿	(16.0) (5.4) 3.0	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	25%	渦巻状暗文
11	皿	(14.5) 6.5 2.4	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	45%	粗な渦巻状暗文
12	皿	(14.5) 6.0 2.5	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	40%	渦巻状暗文
13	皿	(14.8) (7.0) 2.3	体部下半回転ヘラケズリ	30%	渦巻状暗文
14	皿	(15.6) (6.4) 2.7	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	15%	渦巻状暗文
15	皿	(14.0) 4.4 2.1	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	70%	渦巻状暗文 口縁部付近表裏ともススク付着
16	皿	(15.8) 7.0 2.2	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	40%	渦巻状暗文
17	皿	13.4 4.0 2.6	体部下半回転ヘラケズリ 底部糸切り後回転ヘラケズリ	100%	渦巻状暗文
18	皿	(14.8) 6.6 2.6	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	40%	渦巻状暗文
19	皿	(15.2) (6.2) 2.7	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	25%	渦巻状暗文

第6表　旧河床地点出土皿一覧表(2)

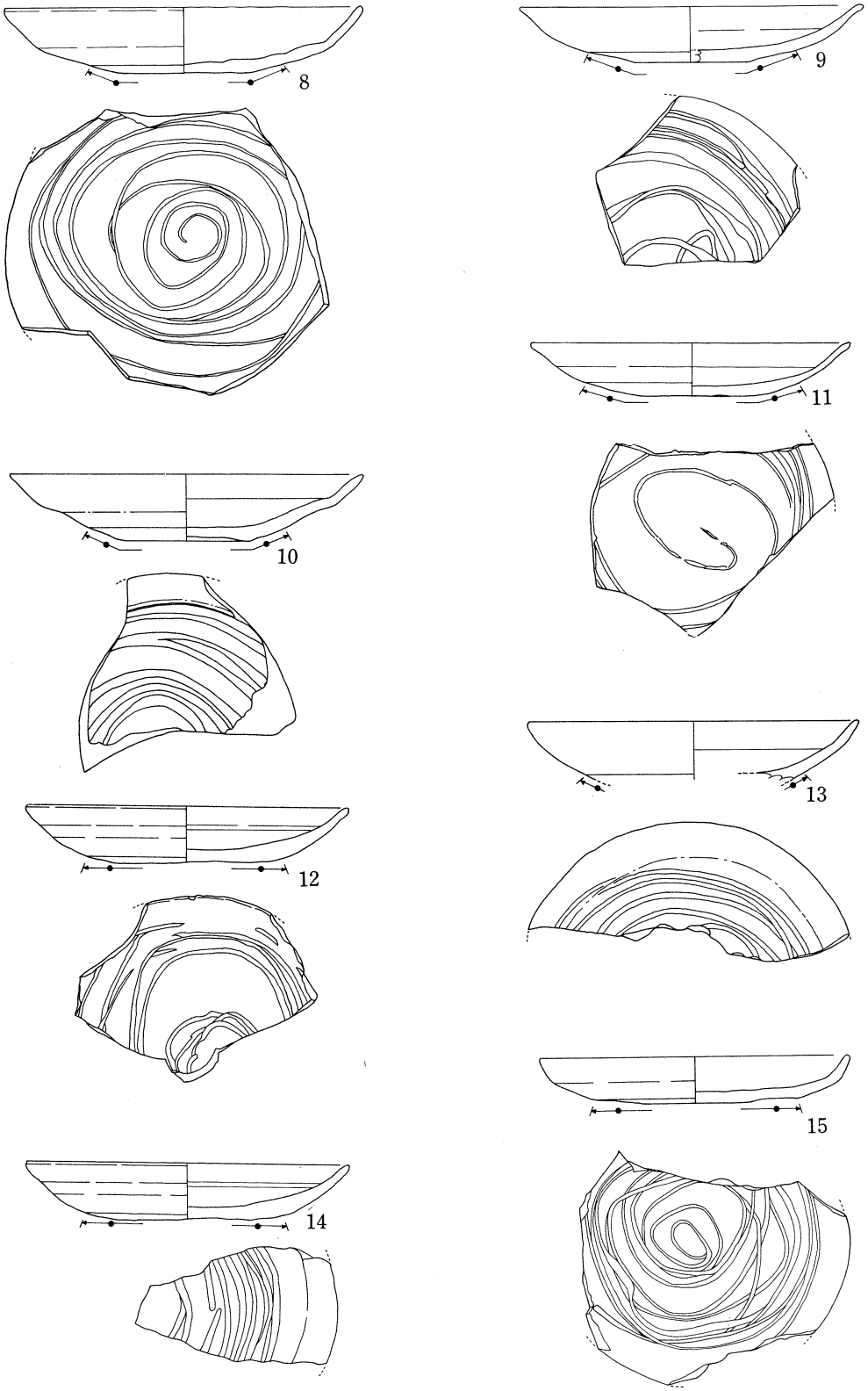
番号	器種	法量	整形技法	残存率	備考
20	皿	(13.4) 5.6 2.6	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	75%	渦巻状暗文
21	皿	13.7 6.8 2.1	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	75%	渦巻状暗文
22	皿	(14.2) 5.0 2.8	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	55%	渦巻状暗文
23	皿	(12.8) (5.8) 2.4	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	20%	渦巻状暗文
24	皿	(14.0) (5.6) 2.7	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	25%	渦巻状暗文
25	皿	6.6	体部下半回転ヘラケズリ 底部糸切り後回転ヘラケズリ		放射状暗文
26	皿	15.8 5.3 2.7	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	45%	放射状暗文
27	皿	6.8	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ		放射状暗文の外縁にも最後に暗文が付される
28	皿	7.0	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ		放射状暗文の外縁にも最後に暗文が付される。 内面スス付着
29	皿	5.7	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ		放射状暗文
30	皿	12.0	底部糸切り後ヘラケズリ		放射状暗文 焼成後底部に線刻
31	皿	(15.2) 6.0 3.0	体部下半回転ヘラケズリ 底部糸切り後回転ヘラケズリ	60%	暗文なし
32	皿	14.4 7.2 2.2	体部下半回転ヘラケズリ 底部糸切り後回転ヘラケズリ	75%	渦巻状暗文
33	皿	(13.1) 4.0 2.5	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	40%	渦巻状暗文
34	皿	13.2 6.3 2.0	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	95%	渦巻状暗文
35	皿	(13.1) 5.4 2.9	体部下半回転ヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	50%	暗文なし
36	皿	(17.9) (6.8) 3.1	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	25%	暗文なし
37	皿	(17.2) 10.0 2.5	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	30%	渦巻状暗文
38	皿	(15.0) (5.3) 2.3	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	25%	渦巻状暗文

第7表　旧河床地点出土皿一覧表(3)

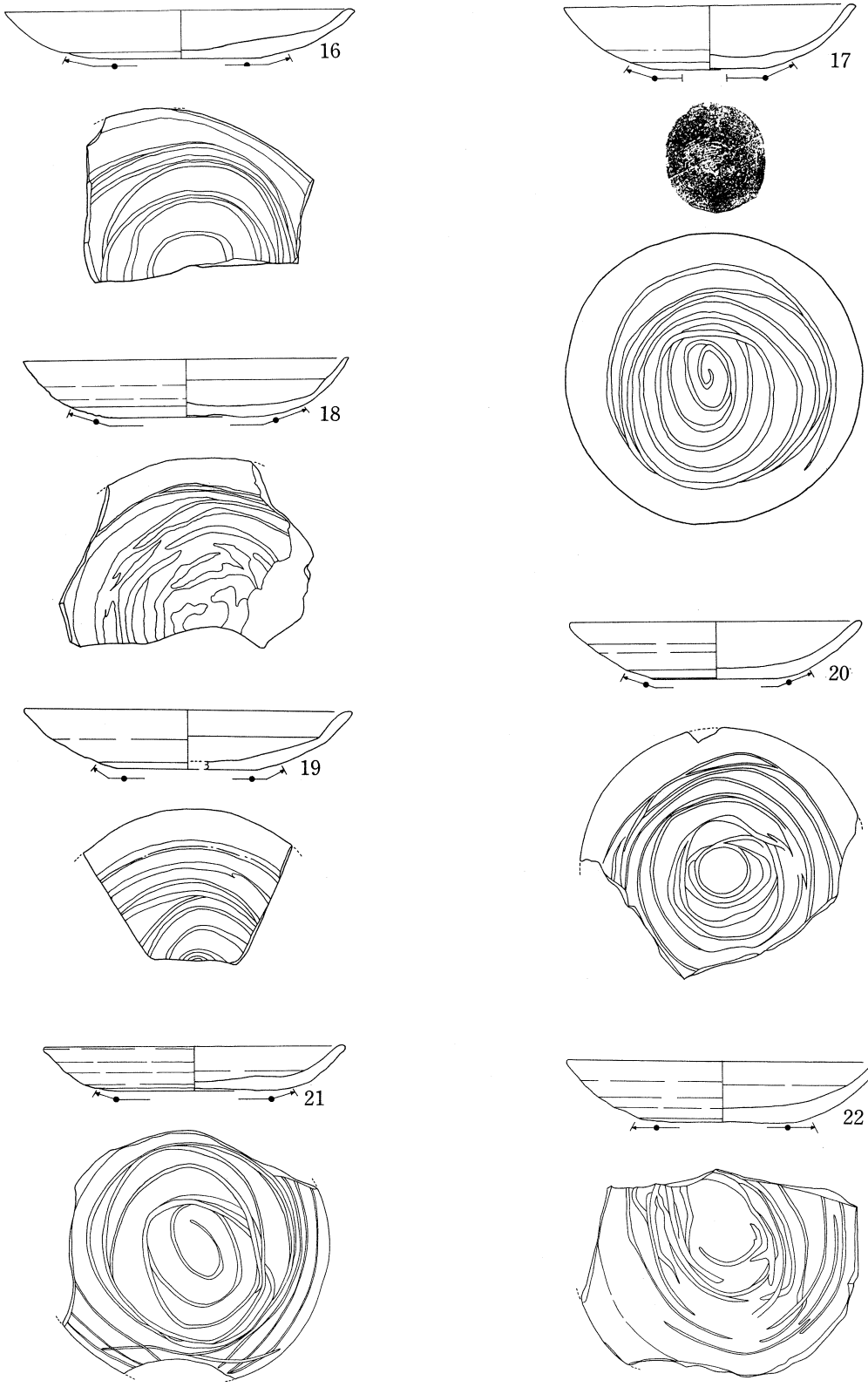
番号	器種	法量	整形技法	残存率	備考
39	皿	(11.5) 5.3 2.3	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	25%	渦巻状暗文
40	皿	(13.6) (5.0) 2.5	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	25%	渦巻状暗文
41	皿	(15.6) (5.9) 3.2	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	30%	渦巻状暗文
42	皿	(14.8) 6.1 2.8	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	40%	暗文なし
43	皿	(15.6) (5.4) 3.2	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	30%	渦巻状暗文
44	皿	(13.1) 4.0 2.5	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	40%	渦巻状暗文
45	皿	(13.6) (4.6) 2.4	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	40%	渦巻状暗文
46	皿	(15.8) 4.6 2.8	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	45%	渦巻状暗文
47	皿	(12.6) (5.3) 3.2	体部下端回転ヘラケズリ 底部糸切り後回転ヘラケズリ	20%	渦巻状暗文
48	皿	(15.4) (10.2) 2.2	底部糸切り後手持ちヘラケズリ	30%	内面ミガキ
49	皿	(15.2) 4.0 2.5	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	35%	渦巻状暗文
50	皿	(13.8) (5.5) 3.1	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	25%	渦巻状暗文
51	皿	(16.6) (10.4) 2.6)	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ（？）	30%	渦巻状暗文
52	皿	(18.4) (7.0) 3.0	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	45%	暗文なし



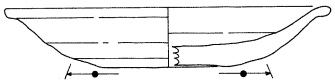
第12図　旧河床地点出土皿(1)　1/3



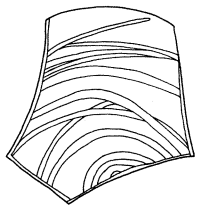
第13図　旧河床地点出土皿(2) 1/3

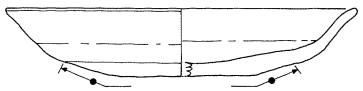


第14図　旧河床地点出土皿(3)　1/3

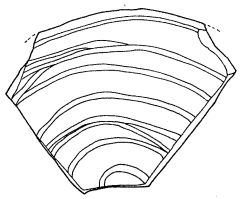


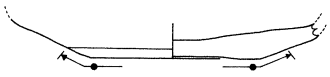
23



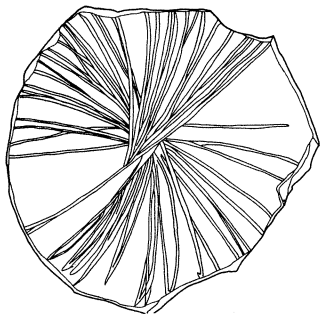


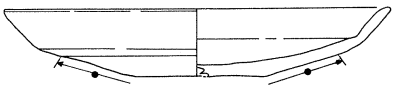
24



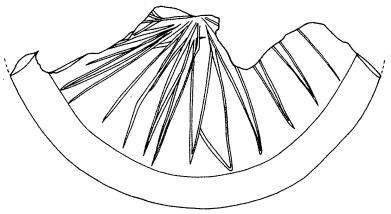


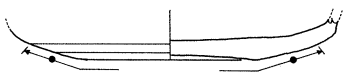
25



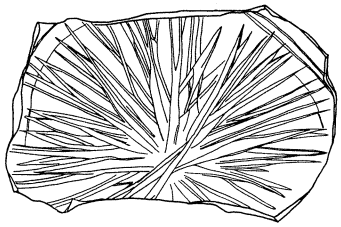


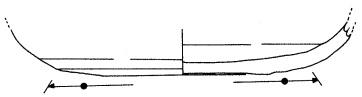
26



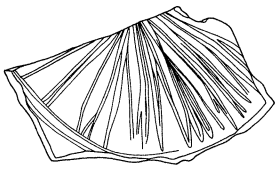


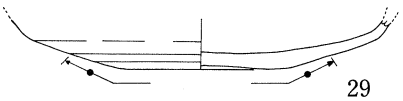
27



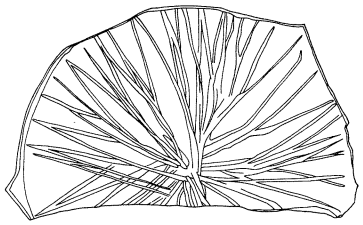


28

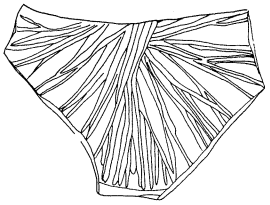




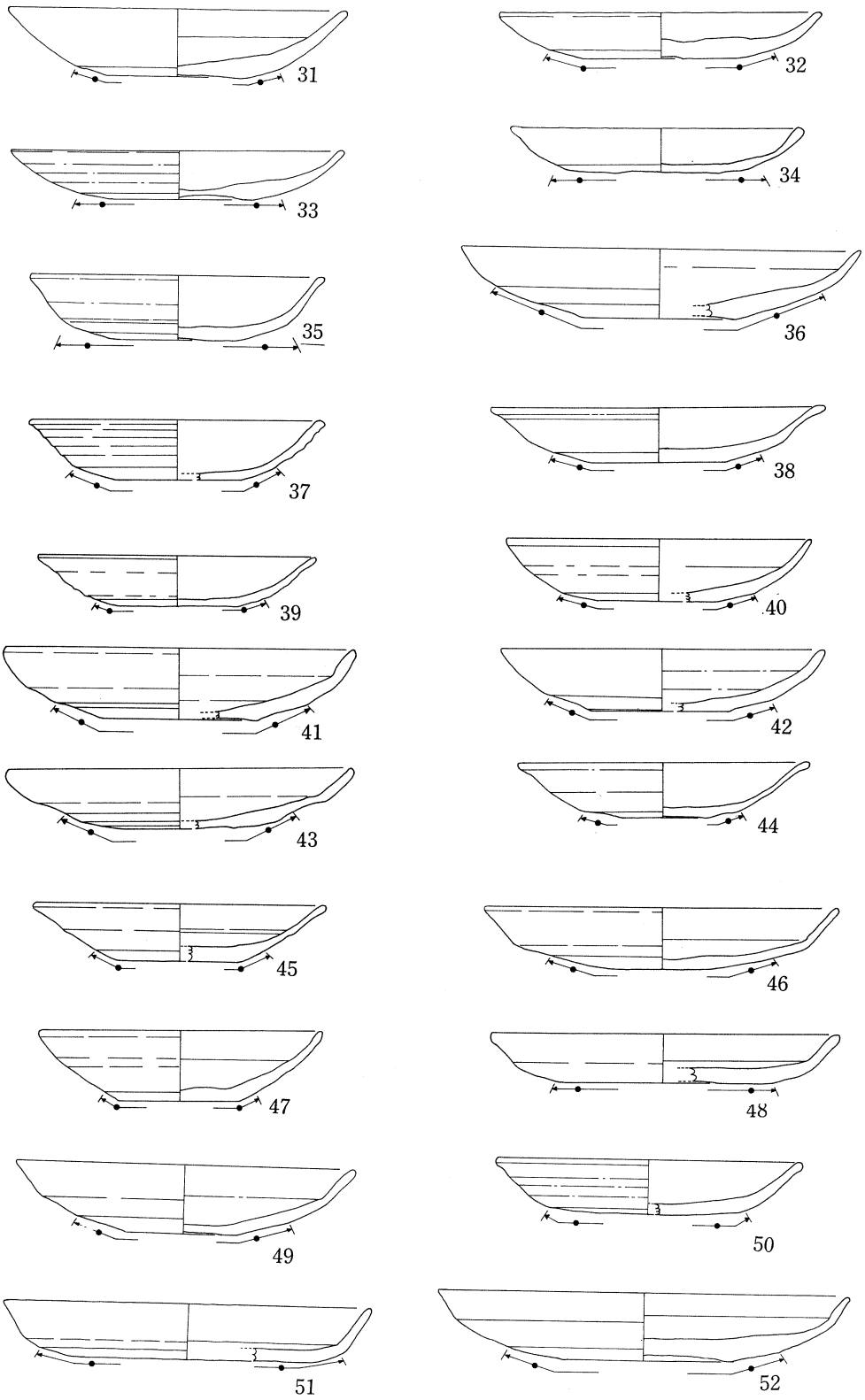
29



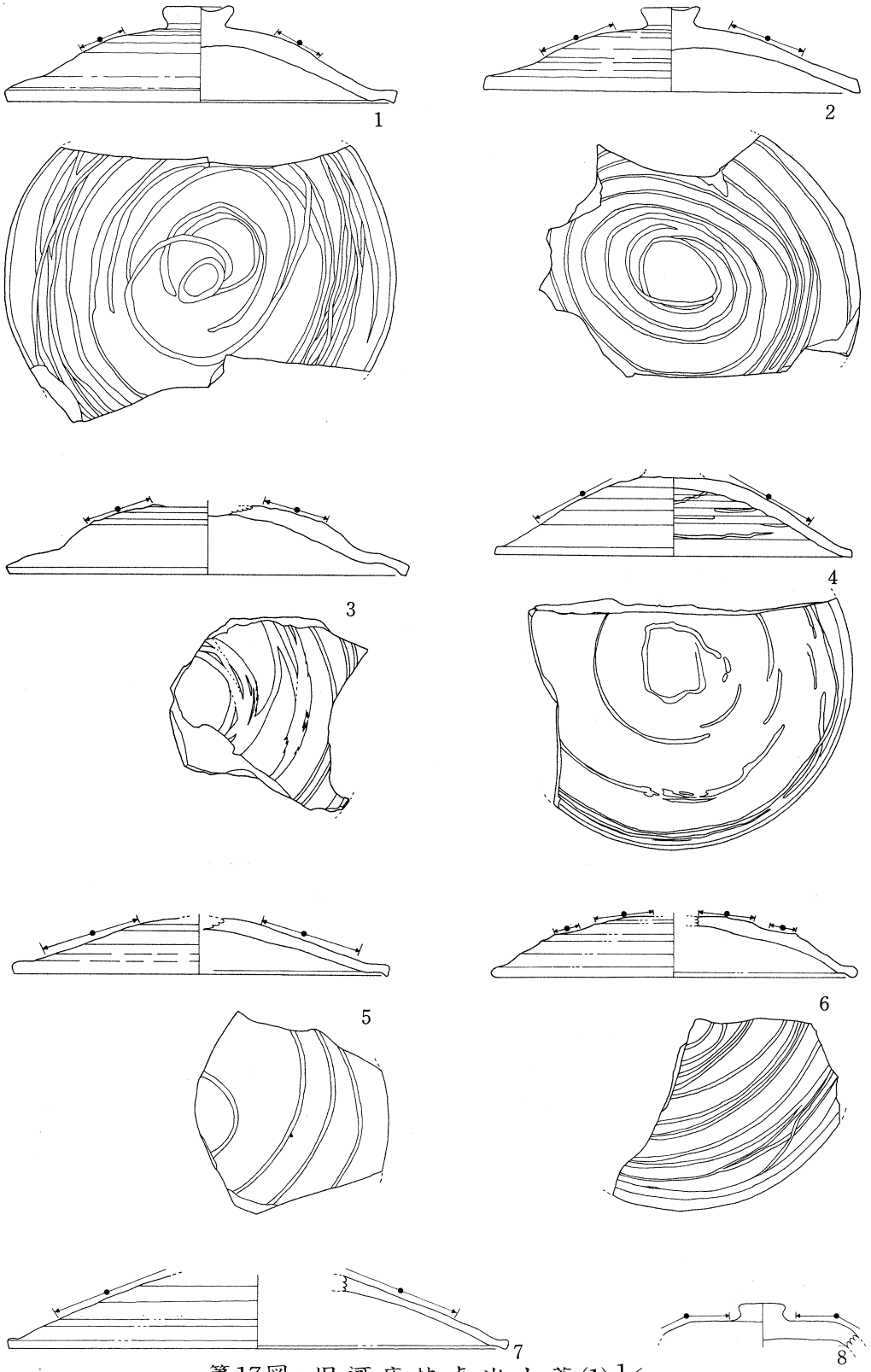
30



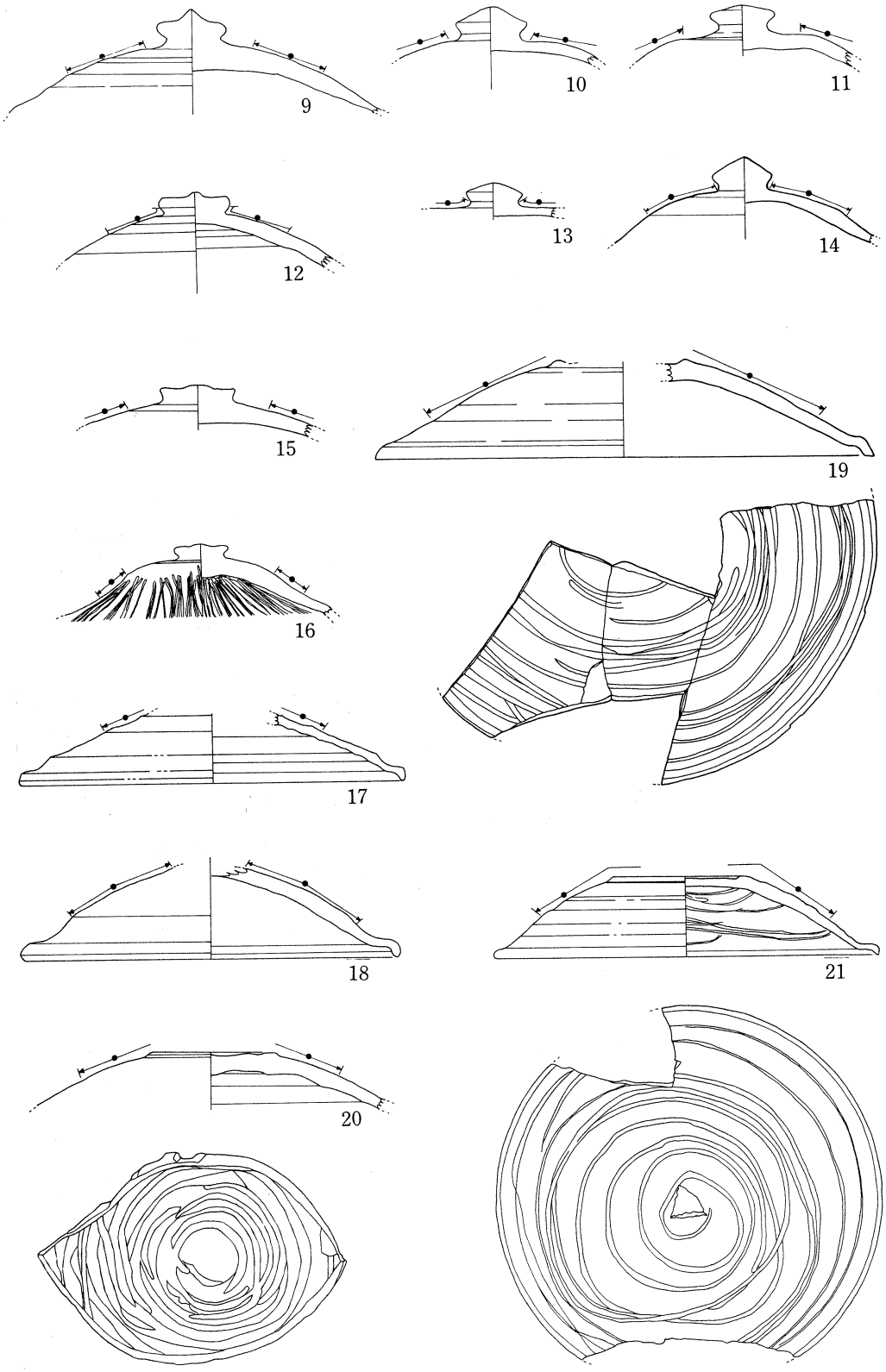
第15図　旧河床地点出土皿(4) 1/3



第16図　旧河床地点出土皿(5)　1/3



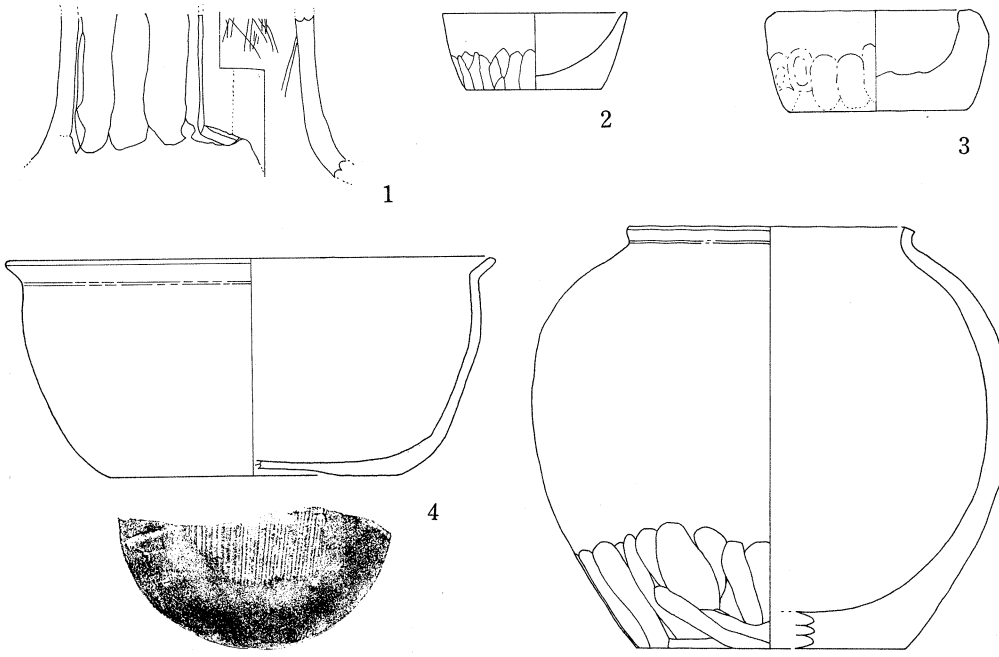
第17図　旧河床地点出土蓋(1) 1/3



第18図　旧河床地点出土蓋(2) 1/3

第8表　旧河床地点出土蓋一覧表

番号	器種	法量	整形技法	残存率	備考
1	蓋	口径18.0 鈕径 3.1 高さ 4.5	体部上半回転ヘラケズリ	70%	渦巻状暗文
2	蓋	(17.4) 2.7 3.9	体部上半回転ヘラケズリ	55%	渦巻状暗文 内面スス付着
3	蓋	(18.2)	体部上半回転ヘラケズリ	20%	渦巻状暗文
4	蓋	16.6	体部上半回転ヘラケズリ	60%	渦巻状暗文
5	蓋	(17.6)	体部上半回転ヘラケズリ	25%	渦巻状暗文
6	蓋	(15.0)	体部上半回転ヘラケズリ	30%	渦巻状暗文
7	蓋	(23.2)	体部上半回転ヘラケズリ	30%	渦巻状暗文
8	蓋	2.2	体部上半ミガキ状回転ヘラケズリ		
9	蓋	3.2	体部上半回転ヘラケズリ		渦巻状暗文
10	蓋	3.3	体部上半回転ヘラケズリ		幅広渦巻状暗文
11	蓋	3.0	体部上半回転ヘラケズリ		渦巻状暗文
12	蓋	3.3	体部上半回転ヘラケズリ		渦巻状暗文
13	蓋	2.7	体部上半回転ヘラケズリ		放射状暗文
14	蓋	2.7	体部上半回転ヘラケズリ		暗文なし
15	蓋	3.4	体部上半回転ヘラケズリ		渦巻状暗文 内面スス付着
16	蓋	2.5	体部上半回転ヘラケズリ 体部放射状ミガキ		放射状暗文
17	蓋	(17.8)	体部上半回転ヘラケズリ		渦巻状暗文
18	蓋	(17.6)	体部上半回転ヘラケズリ後渦巻暗文状ミガキ	30%	渦巻状暗文
19	蓋	22.9 (6.0) 4.3	体部上半回転ヘラケズリ リング状削り出し鈕	40%	渦巻状暗文
20	蓋	6.0	体部上半回転ヘラケズリ リング状削り出し鈕		渦巻状暗文
21	蓋	17.5 6.1 3.7	体部上半回転ヘラケズリ リング状削り出し鈕	90%	渦巻状暗文

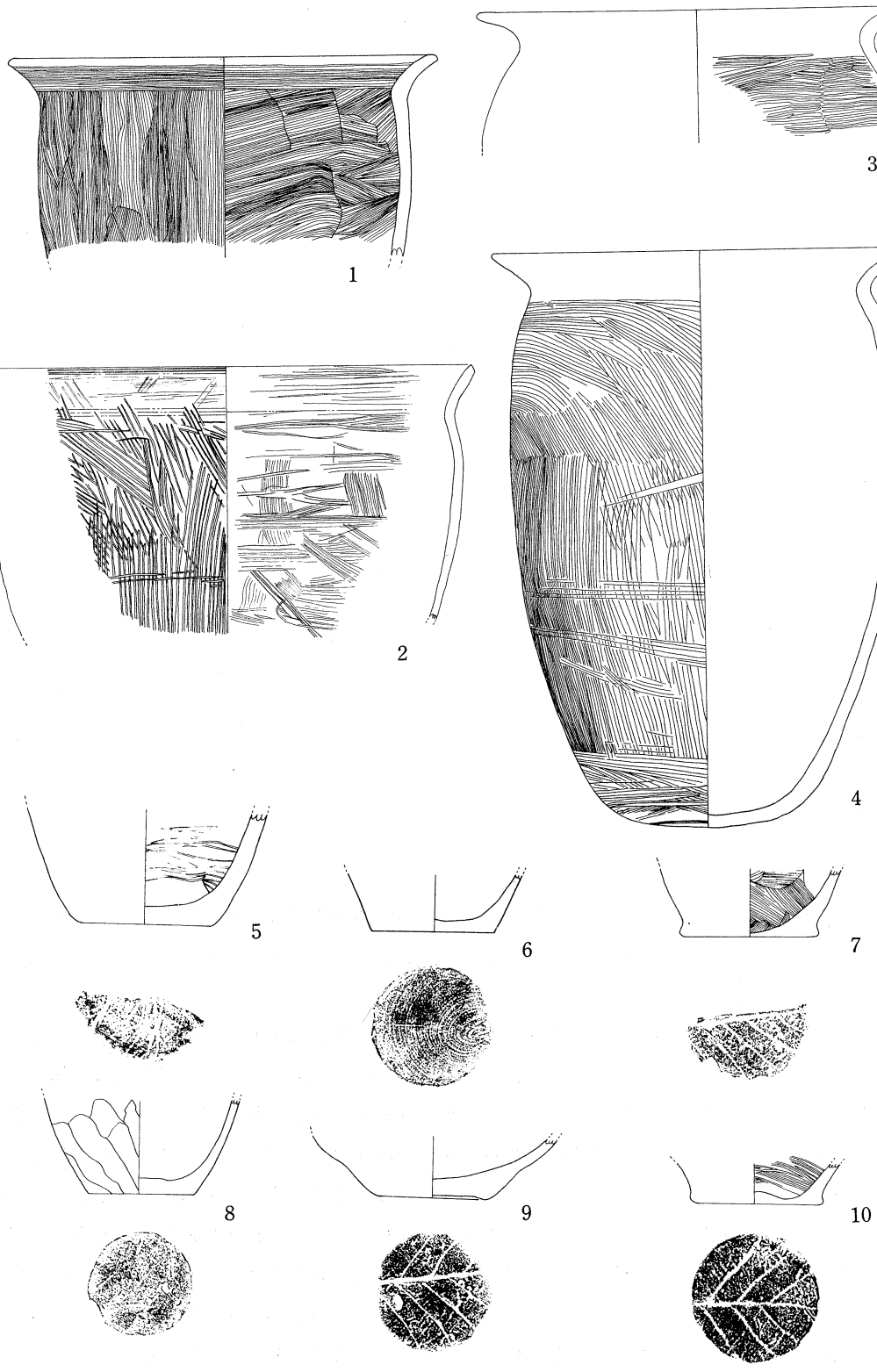


第19図　旧河床地点出土土師器 1/3

第9表　旧河床地点出土高坏・鉢・壺等一覧表

※法量の数字は、口径・底径・高さを表わし、（　）は、推定値を示す。単位cm。

番号	器種	法量	整形技法	残存率	備考
1	高坏？		ロクロ成形後手持ちヘラケズリ		四角形の透しが入る 焼成良好
2		7.3 5.4 3.0	ロクロ成形後体部下半、底部ともに手持ちヘラケズリ	95%	内面口縁部にススタールが付着
3		7.6 6.7 4.0	手捏ね	95%	内外ともに指頭圧痕が明瞭
4	鉢	(19.4) 11.1 8.6	ロクロ成形、底部糸切り後手持ちヘラケズリ	40%	焼成良好
5	壺	11.2 (10.6) 16.7	ロクロ成形、体部下半手持ちヘラケズリ。底部手持ちヘラケズリ	45%	



第20図　旧河床地点出土甕 1／4

第10表　旧河床地点出土甕一覧表

※法量の数字は、口径・底径・高さを表わし、（　）は推定値を示す。単位cm。

番号	器種	法量	整形技法	残存率	備考
1	甕	(25.2)	ハケメ整形 口縁部ナデ整形		外面スス付着
2	甕	(29.4)	ハケメ整形 口縁部ナデ整形		外面スス付着
3	甕	(24.8)	ハケメ整形 口縁部ナデ整形		外面スス付着
4	甕	24.8 34.4	ハケメ整形 口縁部ナデ整形	98%	外面底部付近スス付着 内面口縁部にタール付着
5	甕	(7.8)	内面ハケメ整形		木葉底
6	甕	7.3	ロクロ成形 底部糸切り		外面スス付着
7	甕	7.7	内面ハケメ整形		木葉底
8	甕	6.3	ロクロ成形底部へラケズリ 胴部下半手持ちへラケズリ		内外ともスス付着
9	甕	6.3			木葉底
10	甕	7.5	ハケメ整形後ナデ整形		

(3) 須恵器

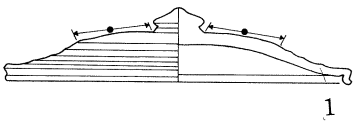
器種は、蓋・坏・甕・長頸壺が確認される。

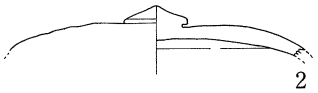
1の蓋は、擬宝珠形のつまみのつくものである。体部上半は、回転へラケズリ整形されて平担になっている。内面は、ススの付着があり、中央部は磨耗して滑らかになっている。硯として転用されたものである。

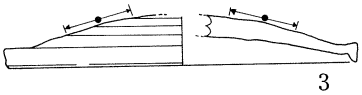
坏は、底径のやや大きめの糸切り痕を残すものと、断面四角形の高台付のものがある。7は、白っぽい色調の仕上がりをみせ、胎土は精緻で他と区別される。上げ底風の底部は、糸切り後周囲をへラケズリしている。8は、やや丸底風の底部に断面四角形の大きめの高台が付けられている。9は、底部糸切り後断面四角形の高台が付けられ、ロクロ整形されている。

10～12は、甕の口縁部である。10は折り返し口縁をもち、薄く自然釉が付着している。11も折り返し口縁をもつ破片であるが、頸部のくびれが激しく、胴部が張る形をとる。胴部表面には、平行線状の叩き目が施されている。12は口径の大きな甕で、径5㎜以上の砂粒が含まれ、割と粗雑な造りとなっている。須恵器の中で、甕の胴部破片で平行線や格子目の叩き目のある破片が、全体の約8割を占める。内側に青海波文のあるものもある。

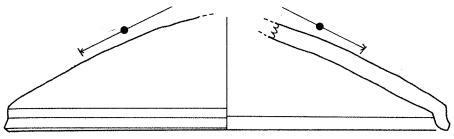
113は、長頸壺の頸部である。胎土は緻密で良好な仕上がりである。

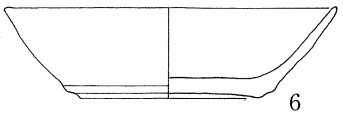

1

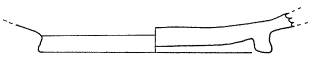

2

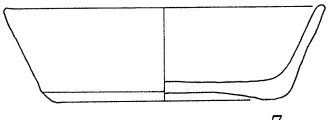

3

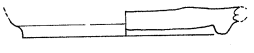
4

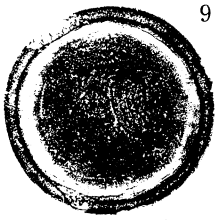

5

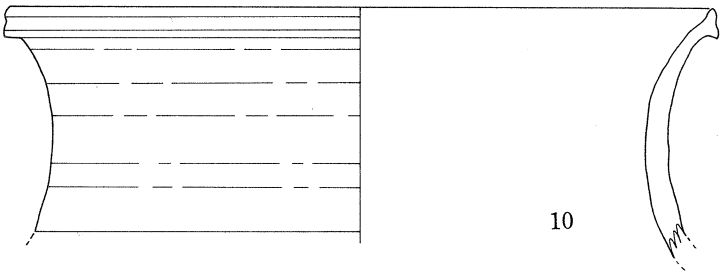

6

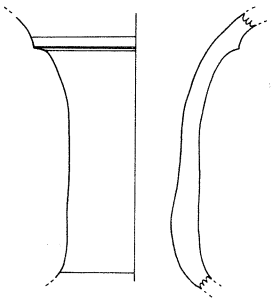

8

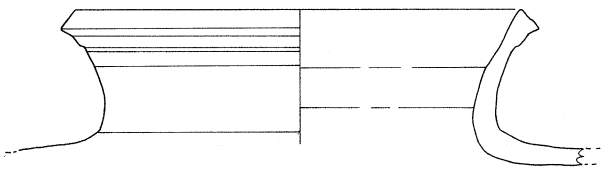

7

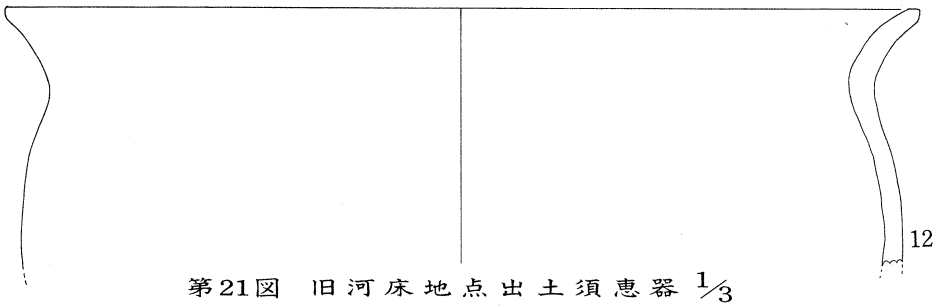

9




10


13


11


12

第21図　旧河床地点出土須恵器 1/3

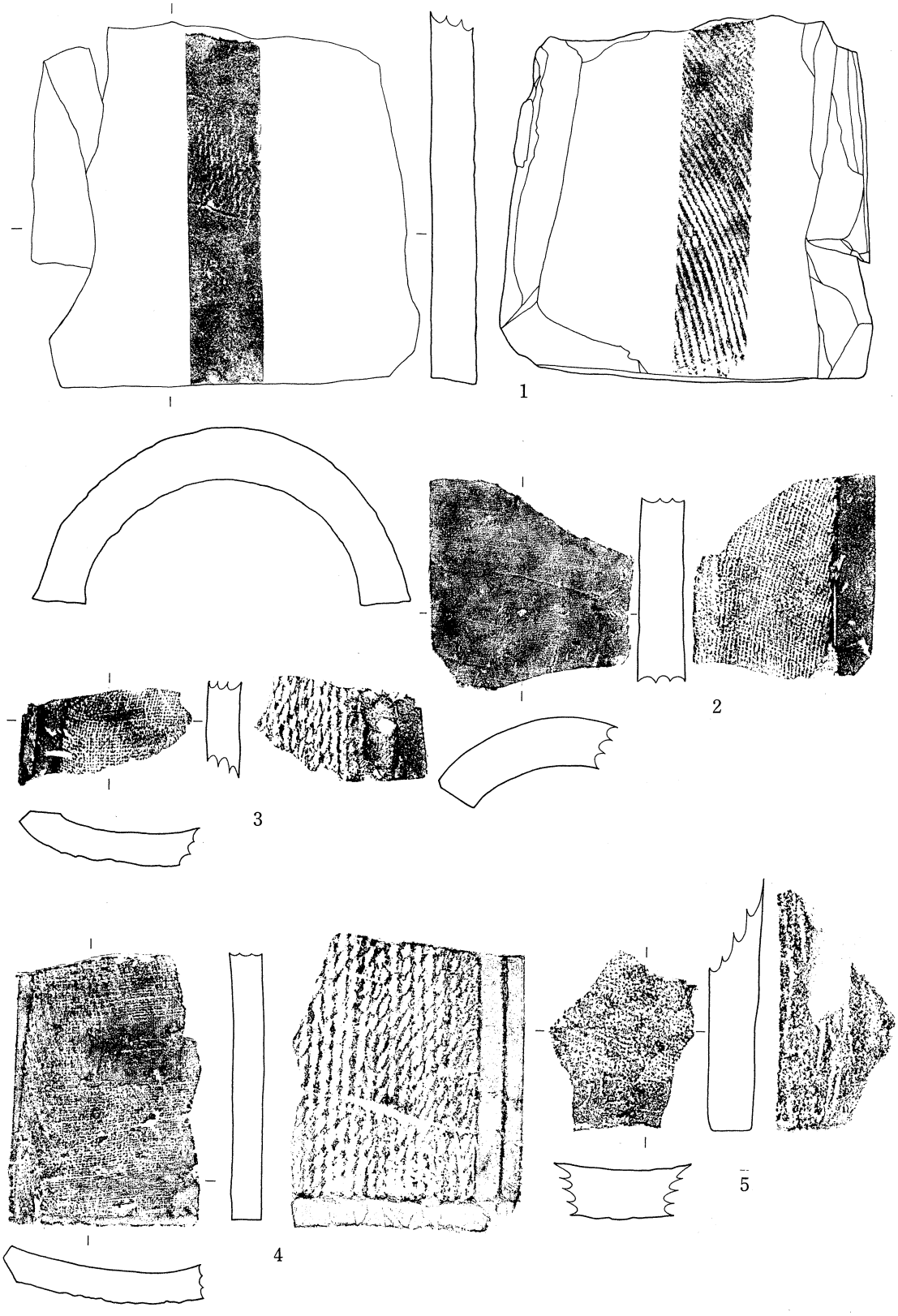
第11表　旧河床地点出土須恵器一覧表

※法量の数字は、土師器に同じ。

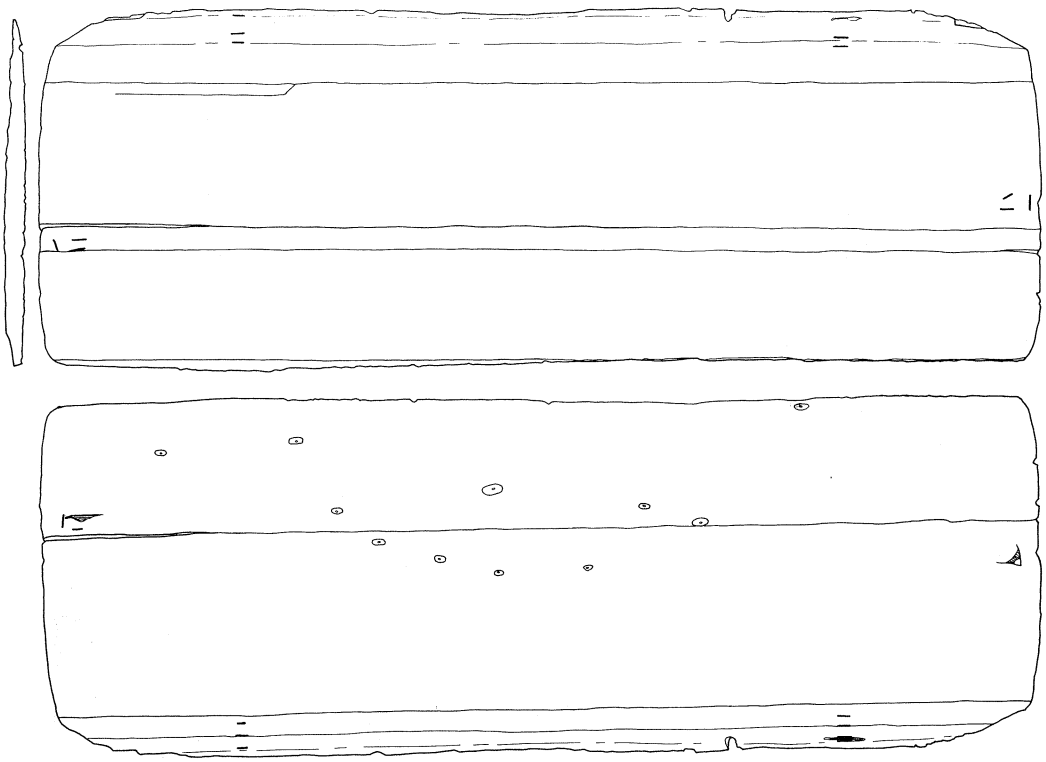
番号	器種	法量	整形技法	残存率	備考
1	蓋	12.5 2.1 2.8	体部上半回転ヘラケズリ	90%	内面墨付着 硯に転用
2	蓋	2.5	ロクロ成形		
3	蓋	(14.0)	体部上半回転ヘラケズリ	20%	
4	蓋	(14.6)	体部上半回転ヘラケズリ	20%	
5	蓋	(17.4)	体部上半回転ヘラケズリ	25%	
6	坏	(13.2) 6.9 3.6	底部糸切り	60%	
7	坏	(12.2) (8.6) 3.7	体部下端回転ヘラケズリ 底部糸切り	25%	
8	坏	9.2	底部回転ヘラケズリ 付け高台		
9	坏	8.2	底部糸切り後回転ヘラケズリ 付け高台		
10	甕	(28.0)	口縁部ナデ整形		表裏ともに自然釉付着
11	甕	(17.7)	胴部タタキメ 口縁部ナデ整形		表面自然釉付着
12	甕	(36.0)	口縁部ナデ整形		
13	長頸壺		粘土帯積み上げ		表裏ともに自然釉付着

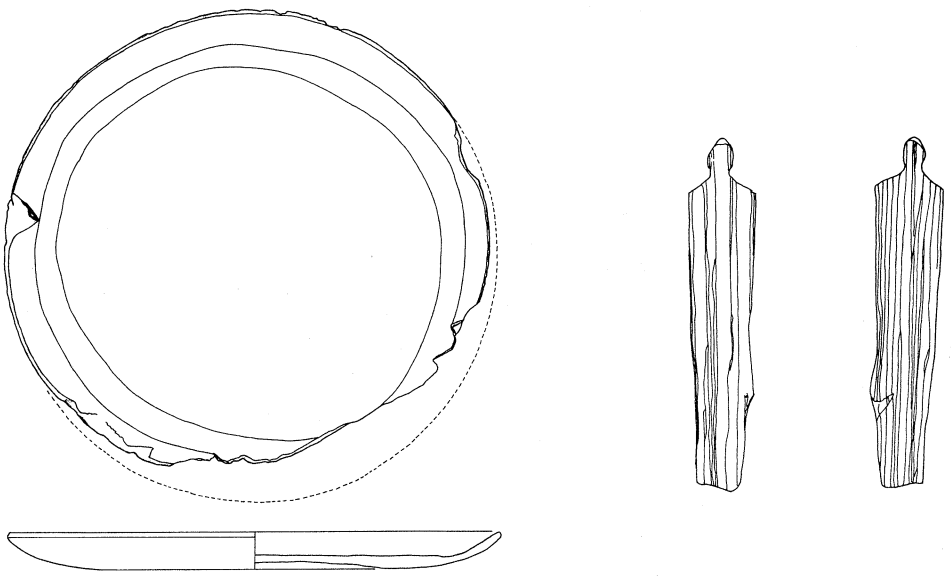
第12表　旧河床地点土瓦一覧表

番号	種類	成形	凸面	凹面	側面
1	丸瓦	桶巻き造り	撚糸L・ナデ	布目後櫛目	ヘラケズリ
2	丸瓦	桶巻き造り	ナデ	布目	ナデ
3	平瓦	一枚造り	撚糸L	布目	ヘラケズリ
4	平瓦	一枚造り	撚糸L	布目	ヘラケズリ
5	平瓦	不明	撚糸L	布目・炭化物付着	ヘラケズリ



第22図　旧河床地点出土瓦 1/3





第23図　旧河床地点出土木製品 1/3

第4節　植物遺体

(1) 植物遺体

大坪遺跡出土植物遺体は、十郎川旧河床の河成堆積層中にあり、極めて長期間、高含水量、温度平衡条件下に存在したという特徴を示している。木材片は一般にリグニン溶出がみられ、材の基礎組織は脆弱化している。しかし顕微鏡的な材の構成要素はほぼ原形をとどめ、種の同定が可能である。また、種子・果実類はほとんど核果、堅果の上皮のみの残存にとどまり、内容を伴なわぬため同定不能のものも多い。

出土植物遺体は第13表に示したが、木材片は針葉樹材ではコメツガ、ツガ、ヒノキ、スギ、モミなどが見出された。広葉樹材は典型的な落葉広葉樹林帯の構成種でクリ、コナラのほか、オニグルミ、カンバ、カエデ、サクラ類の枝条が見られる。針葉樹には高地性の種もみられるが、他は現在の甲府市北部山間地の植生と大きくは変らない。もし、これらの植物遺体が自然流下材であればその堆積環境から本遺跡後背地の山間部植生を反映すると考えられるが、人為的な加工痕などがあれば、考古学的な考察を加えて検討されるべきものであろう。ちなみに本遺跡付近には奈良・平安時代に土器などを製造した窯があったと推定されているが、その燃料用材の供給といった点からの古植生復原は興味あるテーマである。

一方、種子などの植物遺体中で最も多い種はオニグルミである。ほとんどが内容を伴なわず核は二裂する。次いで多い種はモモの核だが、その大きさにバラツキの多いのが本遺跡の特徴となっている。一般にモモの本邦野生種はその核が、栽培種に比較してあきらかに小さいが、出土したモモの核の大きさのバラツキが何を示唆しているかは資料数の不足もあって正しい判断は下せない。またスモモ *Prunus salicina Lindl* 、と思われる核も5個見出されている。スモモは中国原産であり、本邦では鮮新世における出土例はあるが野生種はない。種の同定と出土に対する考察は、更に甲府盆地内の出土例数や資料数のつみ重ねで検討すべきである。なおモモの核はアカネズミの特徴ある食痕（写真）がみられる。このほかクリ、コナラ、ミズナラ、アベマキの堅果が多数見られるが、いずれも内容（子葉部）を伴なわない。ウリ類の種子1、カキ様の種子1、ヒョウタン類の果皮1がみられた。

またコフキサルノコシカケ *Ganoderma applanatum* (pers. ex wallr.) pat. が一点出土している。本県釈迦堂遺跡（縄文）より炭化した担子菌を検出している（未発表）が、他の出土例は少なく注目すべきものであろう。

以上、大坪遺跡出土植物遺体を概観したが本遺跡が旧河床にあるため、低湿地遺跡とはその堆積メカニズムをやや異にする。さらに資料の数量を蓄積して当時の生活・生業の解明をはかりたい。その意味でも貴重なデーターとなるであろう。　（市河三次：山梨県女短大）

第13表　旧河床地点出土植物遺体一覧表

番号	種別	樹種	学名	備考
1	材片	コメツガ	*Tsuga diversifolia* MASTERS	
2	材片	コナラ	*Quercus serrata* THUNBERG	
3	板材	ツガ	*Tsuga sieboldii* CARRIERE	
4	材片	クリ	*Castanea crenata* S. et. Z.	
5	材片	モミ	*Abies firma* S. et. Z.	
6	材片	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* ENDL.	焼痕
7	材片	スギ	*Cryptomeria japonica* D. DON.	細棒
8	枝条	オニグルミ	*Juglans sieboldiana* MAXIM.	
9	枝条	カンバなど	*Betula spp.*	（多数）
10	枝条	カエデ	*Acer spp.*	
11	枝条	サクラ類	*Prunus spp.*	
12	核果	オニグルミ	*Juglans sieboldiana* MAXIM.	
13	〃	モモ	*Prunus persica* BATSCH	
14	堅果	ミズナラ	*Quercus crispula* BLUME	
15	〃	クリ	*Castanea crenata* S. et. Z.	
16	〃	アベマキ	*Quercus variabilis* BL.	
17	種子	ウリ類(?)	CUCURUBITACEAE	キカラスウリに似る
18	〃	カキ(?)	*Diospyros taki* THUNB.	奈良時代以降に出土
19	果皮	ヒョウタン類		裂片

(2) 動物遺体

大坪遺跡出土獣骨鑑定書

小林家蓄病院　院長　小　林　君　男

昭和57年11月12日～12月6日甲府市横根町字大橋212番地、大坪遺跡発掘調査出土の骨24点、歯7点及び出土時の写真を詳細に検討した結果、次のとおり鑑定しましたので報告致します。

出土品の獣骨及び歯は、我国の在来馬（すでに絶滅した馬ですが、木曽馬に近い小型の馬種）です。また、馬の年令は、歯の状態により成獣であると推定されますが、牡牝は不明です。

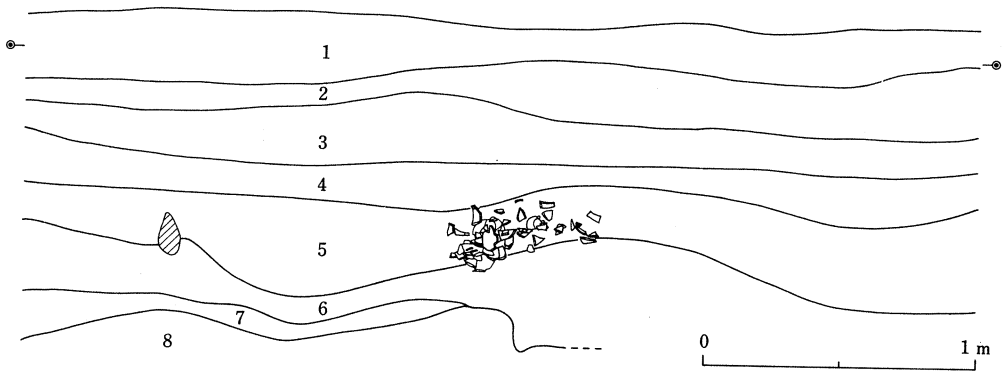
資料中に幸いに殆んど原形で出土した下顎骨は、下縁の形に在来馬の特徴を示しています。中手骨は、骨端に馬特有の形がみられます。歯は、前臼歯3、後臼歯3が下顎骨に残っており、分離したものに切歯2、臼歯5があります。切歯には、幼獣に見られる歯漏斗がないため成獣である事が判断できます。他に馬の第18肋骨（最後肋骨）、馬の第3頸椎、犬の可能性のある尺骨等がみられます。

第Ⅴ章　教　習　所　地　点

第１節　層　　序

第１層、教習所整地の際の客土。第２層、灰褐色土層、ぶどうの根の進入が著しい耕作土。第３層、灰褐色土層、径５㎜以下の砂粒や炭化物が多く含まれる。粘性は弱くまれに土師器の小片が入る。第４層、暗灰褐色粘土層、黄褐色の酸化鉄が多く含まれる。色調は３層と５層の中間であり、まれに土師器の小片が入る。第５層、茶褐色・漆黒色混合粘質土層、黄褐色酸化鉄の粘性の少ない土が多量に混ざる。平安時代前半の土師器が最も多く含まれている。第６層、漆黒色粘土層、密度が高く非常に粘性が強い。上部に土師器を含む。第７層、漆黒色・緑褐色粘土層、粘性が強く６層と８層の上面の層との混合層である。まれに土師器が含まれ、酸化鉄の黄褐色の斑点も含有する。第８層、緑褐色砂質土層、上位５cmほどは粘性が強く灰色味がかかっている。

第４層は、旧水田の床土下の土で瓦の原料となった土層である。地元の人の話では、戦前付近の瓦屋がこの土を買い求めて、瓦を造っていたという。



第24図　教習所地点土層図

第２節　遺物の出土状態

発掘調査地点は、教習コース下に埋設される雨水排水管の掘削断面中に遺物が露呈していた部分である。

遺物は、第３層から第７層までの間に見られた。土師器が集積された状態で集中していたのは、第５層と第６層の上面であり、高低差20cmの幅である。平面的には、南北60cm東西20cmの狭い範囲であるが、工事の掘削により西側へはもう少し広がっていた可能性がある。遺物は、集中していたが特別な掘り込み等の施設はないようである。（第24図）

土師器の集中部分は、25図の11の坏が最下部に置かれ、その上に５の坏・１の皿・８の坏とほとんど完形に近い土師器が正位に積み重ねられた状態で出土した。（写真図版２右上２

点）さらにこれらの上方には、坏を中心とした土師器の破片が散在していた。

これらの遺物は、一括廃棄されたというより、あたかも置かれたような整然さを感じさせる出土状態であった。

第3節　出　土　遺　物

本地点出土の遺物は、すべて土師器である。この土師器は、粘土質の土層中に包含されていたため表面が荒れているものがほとんどであり、内面に描かれている暗文もかすかに痕跡を留めるのみの状況である。

皿は、1のみが唯一器形を窮える資料である。底部は回転ヘラケズリ調整され、体部下端も同様に回転ヘラケズリ調整されている。この調整がなされる前に斜位方向のナデが施されている。器形は、体部に丸味をもち、口縁部はやや外反し丸頭状になる。内部は、体部中央で断差がつき、わずかに渦巻状暗文の痕跡が残る。胎土は、坏などとも同様にこの土地特有の赤色の小スコリアが混ざり、器面には赤褐色と白色の縞が看取される。

本地点出土の坏は、口径の集中度合から大きく3分類される。

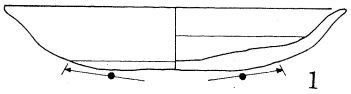
坏1類　口径11.3cmを中心とするものである。底径は、5.0cm高さ 3.7cm付近に集中する。底部は、糸切り後ヘラケズリ調整されている。体部下半は、手持ちで斜位のヘラケズリが施されており、内面には放射状暗文を有する。口縁部は、6のようにやや玉縁化して外反するものと、8のように体部からそのまま丸頭状になるものがある。底部内側は、中心部と外縁部が薄くなり、環状に厚くなってドーナツ状を呈する。

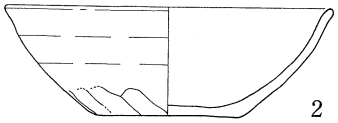
坏2類　口径が12.8cm付近のもの。底径は 5.5cm・高さ 4.4cm付近に集中する。底部は糸切り後ヘラケズリされているが、4・7のように糸切りの痕跡をまったく残さないものもある。体部下半は、斜位の手持ちヘラケズリが施されている。体部内面には、放射状暗文が見られるが、3・4にはその痕跡は留められていない。口縁部は、やや玉縁化し外反する。

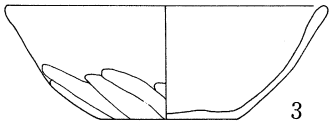
坏3類　口径が15.4～16.2cmの範囲のもの。底径は、7.0～ 8.0cmの範囲で、高さは 6.0cm付近に集中する。底部は、糸切り後回転ヘラケズリ調整されており、削り出し高台になっている。回転ヘラケズリ調整は体部下半に及び11の底部は糸切りの痕跡を留めないほど入念に施されている。体部内面には、9・10に放射状暗文の痕跡が残るが、11は器表が荒れているため、その存否は不明。体部は9・10がやや丸味をもち、11は直線的である。口縁は、丸頭状を呈するが、9のみやや玉縁化し外反する。

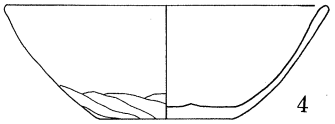
図示できなかったが、他の器形としては蓋がある。口径は20cm前後で、端部にかえりをもつものである。器表は荒れており、暗文の有無は不明である。

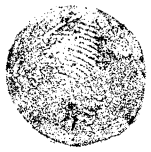
上記の土師器は、旧河床地点の分類によると、皿1類、坏4・5類、蓋3類に当たる。

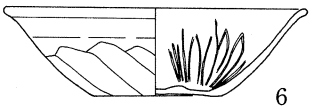

1

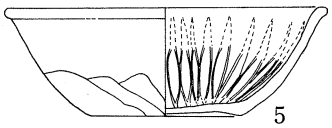

2


3

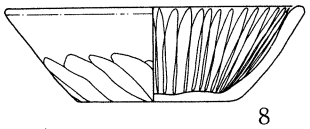

4

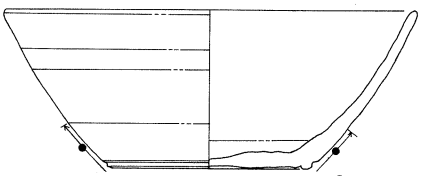


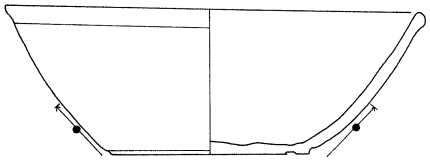

6

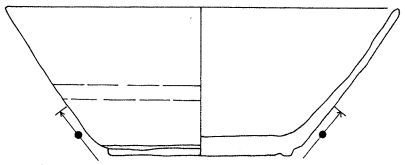

5

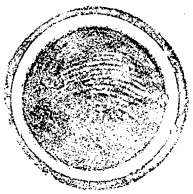
7


8


9


10


11



第25図　教習所地点出土土師器 1/3

第14表　教習所地点出土土器一覧表

番号	器種	法量	整形技法	残存率	備考
1	皿	13.5 5.1 2.5	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	65%	渦巻状暗文の痕跡
2	坏	(12.8) 5.8 4.4	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	55%	放射状暗文の痕跡
3	坏	13.0 5.5 4.5	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	80%	
4	坏	12.7 5.3 4.5	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	100%	
5	坏	12.6 5.9 4.3	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	80%	放射状暗文
6	坏	11.4 5.0 3.7	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	80%	放射状暗文
7	坏	(13.0) 5.3 4.5	体部下半手持ちヘラケズリ 底部ヘラケズリ	60%	放射状暗文
8	坏	11.7 5.0 3.8	体部下半手持ちヘラケズリ 底部糸切り後ヘラケズリ	100%	放射状暗文
9	坏	16.2 7.8 6.3	体部下半回転ヘラケズリ 底部糸切り後回転ヘラケズリ	65%	放射状暗文の痕跡 削り出し高台
10	坏	16.2 7.6 5.7	体部下半回転ヘラケズリ 底部糸切り後回転ヘラケズリ	80%	放射状暗文の痕跡 削り出し高台
11	坏	15.4 7.0 5.9	体部下半回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ 削り出し高台	97%	

第Ⅵ章　ま　と　め

第1節　出土遺物について

土師器

本遺跡出土の土師器は、五領期から国分期のものまで幅広く存在する。本文中で詳しくふれることができなかった遺物量の豊富である奈良時代から平安時代前期の坏・皿・蓋・甕について、本文中の分類に従って説明を加えてみたい。

(1)　坏

坏1類（第8図1～10）

口径の大きさと比較して底径が大きく暗文のないものを一括する。さらに底部の形状で二分が可能である。それは、底部外縁よりも中央部が凸出する丸底状を呈するものと、平底のものである。丸底状を呈するものは、第8図 1・4・10である。 1は、体部の口縁部付近まで手持ちによるヘラケズリが弧状に施されており、ヘラケズリの右半分は左傾する特異なものである。この底部には「十」の墨書がある。10は、厚手のもので、底部外縁部に細かな手

持ちのヘラケズリ調整がみられる。器体部は、内外ともに入念なミガキが施され、光沢をも呈するほどである。外面は、縦方行に細かくヘラミガキされており、内側が横方向であるのと対照的である。内面の底部には、放射状暗文のはしりと言えるような３㎜～５㎜もある幅広のミガキがみられる。平底のものは、整形技法等ほぼ同一である。底部は、中央部にやや凹んで糸切り痕が残り、この周囲を四回以上のヘラケズリによって調整されている。体部は６～８回の粗な間隔で底部から右に傾く斜位方向の手持ちヘラケズリが施されている。内面は、ロクロの成形時の痕跡を明瞭に残すほか、穀物の油分が付着したような暗褐色を呈することが特徴的である。

(2)坏２類（第10図28・31・34・36・39、11図42）

底径が大きくやや浅めであり、体部及びみこみ部にも暗文の施されているものを一括する。高さ約5.0㎝をもって坏第３類との境界とする。器形は、口縁から体部にかけて直立ぎみで底部付近にて、急激に湾曲をすることが特徴的である。28は、他のものに比べ非常に器表の摩耗が激しい個体である。この湾曲部分には横位に近いほど角度の緩かで細かな斜位のヘラケズリが存在する。体部の放射状暗文は口縁付近まで届いておらず、やや空白部分を残す。体部下端のヘラケズリは、本類の中では大きめである。31は、体部の放射状暗文に加え、みこみ部の外縁に円形の暗文のみが入るもので、みこみ部上の放射状暗文のない特異な存在である。34、36、39は、本類中の最も典型的なものである。42の内面は第１類に近く、穀物油脂状の付着があり、外面は長さ３～４㎝の弧状のミガキの形骸化したような痕跡がわずかに残る。

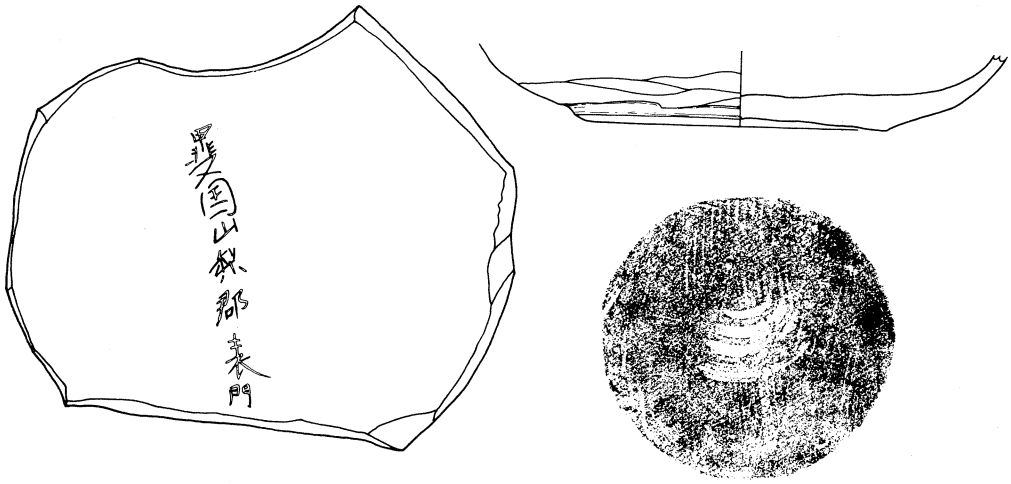
(3)坏３類（８図11～13、９図、10図29）

底径が大きく、深めでみこみ部にも暗文のあるものを一括する。17・19・29と底径のそれほど顕著に大きくないものも一応本類に含めるものとする。大きく２つに大別され、11～14に代表される一群と、18～20に代表される一群に分かれる。

前者は、体部、みこみ部ともに密な放射状暗文があり、みこみ部外縁から体部下端にかけて、0.３～１㎝の円形暗文も加わる。法量は、高さ５㎝、口径12㎝、底径７～８㎝前後に集中し、口縁から底部にかけてゆるやかに湾曲する。11と12には、体部下半に「○○」の墨書があり、両者とも体部下端の手持ちの斜位ヘラケズリ整形後、この痕跡が残らないほどに入念にミガキが施されている。底部も同様にていねいなミガキが施されている。12は、内面$\frac{1}{4}$ほどススの付着が認められる。15は底部に「生」の墨書がみられる。16は、この一群の中では特別法量が大きめで、一般的にみこみ部外縁から体部下端にみられる円形の暗文は施されていない。

後者は、底部が削り出し高台である点が特徴であり、法量のきわめて大きい一群である。18は、内面に密な放射状暗文が施され、外面は底部ともに光滑を放つほど入念なミガキがなされている。19は、内黒でみこみ部に異形な渦巻状暗文がみられる。19・20ともに外面にはミガキが認められない。

この両者に入らない17は、本遺跡中唯一のヘラケズリの方向が逆方向のもので、放射状暗



第26図　旧河床地点出土刻書土器

文も特異なものである。内黒で、やや厚手の作りである。

(4)坏４類（10図21～27、30・32・33・35・37・38、11図40・41、43～48）

底径が小さく、体部のみ暗文のあるものを一括するが、底部の残存しないものの中には第２類、３類に含まれるものもある。（33・43・46・48等）底部は、静止糸切りの後ヘラ状工具で調整されており、体部下半には手持ちヘラケズリが施されている。これまでの時期のものに比べ、暗文の間隔は粗になっており23・47のように花弁状になるものもある。ヘラケズリは、は、体部の上半まで達する顕著なものもでてくるが、41・44・47等のようにまったくないものもある。40の底部は、糸切り後回転ヘラケズリが施されており、これは体部上半にまでおよぶ。48の暗文は、やや密な放射状暗文を施した後、異形の回転暗文が付けられている。

(5)坏５類（11図49～57）

口径に比べて底径が小さく、暗文のないものを一括する。底部は、削り出し高台のものもあり、これには回転ヘラケズリが施されている。53～57は、内黒の坏で他の坏に比べ大型のものが多い。

(2)　皿

皿１類　12図１～３・６・７、13図、14図、15図23・24
16図32～34、37～41、43～47、49～51

渦巻状の暗文をもつものを本類とする。底部から体部にかけて暗文が施されるが、この間隔には広狭があり、中には途中で途切れるものもある。７は特殊な渦巻状暗文をもつもので、螺旋状になる渦巻形を呈する。本類の器形は、おおよそ次のように四大別される。第１群は、１～３に代表される屈曲部の稜線のみられない緩く湾曲するものである。底部に糸切り痕を残し、手持ちのヘラケズリ整形によって体部との境界が不明瞭となっている。底部外縁は厚く１cm以上にもなるが、糸切り痕を残す中央部は凹んでいる。第２群は、6・8・10に代表される底部外縁と体部中央に明確な稜線をもつ一群である。底部及び体部下半は、回転ヘラケズリ整形されている。第３群は、12・17に代表される体部に稜線のみられない一群である。底

部は回転ヘラケズリ整形である。17には、糸切り状の圧痕が残るが糸切り痕のように整然としていない。ある種の工具による余分な粘土の除去の痕跡であろうか。第４群は、5.44に代表される口縁がやや外反し、玉縁状に肥厚する一群である。手持ちのヘラケズリのものと回転ヘラケズリの両者がある。

皿２類（15図25～30）

放射状暗文をもつものを一括する。底部から体部下半は回転ヘラケズリが施されており、されていない部分との境界に稜線がみられることが多い。口縁部まで残存する個体は、26のみであるが、この資料から体部の内外両面に稜がつき、内面の稜線から内側に放射状暗文が付される。この放射状暗文は、底面の半径を基準にするものと直径を基準にするもの、両者が併用されるものの三者看取される。 27・28・30 では、放射状暗文の外縁部の稜線のつく部分にも圷にみられるように円形の暗文が施されている。30の底部は、静止糸切り後底部外縁から体部下端にかけてヘラケズリが施されているが、焼成後に線刻がされている。４本の線は、先の尖った金属のようなもので付けられており、断面はおよそ「Ｖ」字状を呈す。

皿３類 （12図４・５、16図31・35・36・42・48・52、26図）

暗文の施されていない皿形土師器を一括する。暗文の有無以外は、器形・整形技法など１・２類と同じである。

本類に含まれる第26図に示した個体には、底部内面に「甲斐国山梨郡表門」の刻書が施されている。この文字は、先端の尖ったヘラ状の工具を用いて、この土器が乾燥・焼成される前の生乾きの状態の時に書かれたものである。文字の一本一本の線は、幅0.１～0.４㎜ときわめて細い。文字の大きさは、横幅の最小の「門」が６㎜、最大の「斐」14㎜であり、縦の長さ最短の「山」が５㎜、最長の「表」13㎜である。「斐」の字は斐の中央の点が省略されている。これと同様に「国」の字もかまえの中の玉の部分の点が省略されて王になっている。文字の書かれている部分は、「甲」から「門」まで77㎜を測る。「甲斐国」と「山梨郡表門」の文字の中心線は、「国」と「山」の間で約15度のずれがみられる。文字の刻まれている部分は平滑になっているが、詳細に観察すると「斐国」の文字の下の部分に、約15㎜四方の縦位の擦痕がみられる。これは、文字の書き始めを失敗したために、半乾きの粘土の表面を擦って消した痕跡であると推察される。「甲斐国山梨郡表門」と国郡郷が記されているが、「門」の下の部分が欠損しており、「郷」の１字がこれに加わっていた可能性も高い。底径7.６㎝、底部にはヘラ状工具による数種の整形痕が残り、体部下半には手持ちのヘラケズリが施されている。現存高２.4㎝で、胎土には甲斐型の土器に顕著にみられる赤色スコリアがみられ、本地域で生産されたことを暗示している。

(3) 蓋

蓋１類 （17図１・２・８、18図９～16）

擬宝珠形つまみを有するものを一括する。擬宝珠形つまみの形は、中央部が高くなるものが一般的であるが、８のように平らなものもある。中央部の凸出部分は、1・2のように一旦

凹んだのち、中央部が外縁部と同じ高さになる程度にしか作り出されないものもある。ロクロ成形で、鈕の部分は別に作られて付加され、再びロクロで整形されている。鈕のつけ根から体部上半は、ヘラケズリ整形されており、ヘラの当て具合によっては、ミガキのような効果を出しているものもある。内側には渦巻状暗文が施されるほか、8・16のように放射状暗文のもの、14のように暗文の付されないものもある。16は、外側にも放射状暗文状のミガキが施されており、良好な仕上がりを呈している。

蓋2類（18図19～21）

高台形のつまみを有するものを一括する。ロクロで成形したものを裏がえし、回転ヘラケズリによって削り出し高台状の鈕を作り出している。鈕径は、どれもほぼ6cmの大きさである。体部上半から、中央部まで回転ヘラケズリ整形されている。内側には、すべての個体に渦巻状暗文が施されている。本類の一見高台風の鈕の付く土師器の蓋は、県内ではこれまでに報告例の皆無であったものである。県外に目を転ずれば、須恵器としては南多摩窯址や北武蔵窯址で焼かれており、武蔵の集落跡からの発見例も多い。

蓋3類（17図3～7、18図 17・18）

つまみの明確でない蓋を一括する。その破損の程度などから、擬宝珠形の鈕のつく1類に含まれるものが大部分を占める。外縁部の蓋特有のかえりの部分は、17・18のように顕著なものと、4のようにつかないものがある。

土師器の蓋は、甲斐国以外ほとんど使われておらず、他地域では須恵器の蓋が一般的である。本地点出土の蓋は、口径が15～23cmと大型のものであり、この蓋に対応できる口径を有した坏の出土は少ない。あるいは、皿や木製品の蓋としての用途も考える必要があろう。

(4) 甕

甕1類（20図1～5・7・9・10）

輪積み成形の甕を一括する。すべて長胴甕と思われる個体である。1・2・4の口縁部の破片をみると、外反する口縁部に横ナデがみられ胴部は縦位方向を基調としたハケ目整形痕が残る。口縁部形態は、1・2のようにゆるく外反するものと、3・4のように急角度で外反する二つに分かれる。ほとんどの個体の内側には、横位方向を基調としたハケ目整形痕が残る。底部は、木葉痕を残す平底のものが一般的で、不安定な丸底のものもある。すべてにススの付着がみられ、使用時の痕跡を残す。4は、最大径を口縁にもつ長胴甕の真間期に属する完形個体である。口縁部が横ナデによって消されているが、表面にのみ縦方向のハケ目調整が施されている。

甕2類（20図6・8）

ロクロ成形の甕である。6の底部は糸切り底で、やや薄手の作りである。8は、底部及び胴部下端に、手持ちのヘラケズリ整形痕を有する。2例の出土ではあるが、県内では八ヶ岳南麓に多くみられ、長野県地方の影響が考えられている。

漆付着土師器（写真図版14中段）

左より放射状暗文のある国分期の坏、小さく外反する口縁をもつ和泉期の坏、11図58に示した国分期の坏の内面にみられる。他に須恵器の甕と思われる底部破片に付着している例もある。漆は、縄文時代から現代まで使われ続けている天然の資源である。この地に居住した古墳時代から平安時代の人々も、漆を利用し役立てていたことが知られる。

紡錘車（写真図版14右上）

土製の紡錘車で、奈良・平安時代の遺物中に混在しての出土である。表面に黒色の漆が塗布されている。

第2節　大坪遺跡の性格

大坪遺跡を中心とする横根町から和戸町、川田町にかけての一帯は、良質の粘土を産する土地である。この粘土を利用して、古くから土器や瓦が焼かれていた。

本遺跡の東方約700mの地点には、川田瓦窯址があり、白鳳期から奈良時代前期にかけての瓦が焼かれていた。ここで出土した瓦と同范の鐙瓦が春日居町の寺本廃寺址より発見されており、寺本廃寺造営のための瓦窯址であったとされる。現在この瓦窯址には、多数の布目や縄目を有する丸瓦や平瓦の破片が散在しており、大坪遺跡の旧河床地点や県教育委員会の調査した地点でも、丸瓦や平瓦の破片が出土していることから、川田瓦窯址との関連も窺われるところである。この地域での瓦生産活動が行なわれるようになった背景には、古墳時代からの土師器生産の伝統があったためであろう。

本遺跡の西方約600mの山崎踏切の北に存在する摩利支天社境内には、山梨瓦製造組合によって大正12年に建立された聖徳太子遺徳之碑がある。これは、聖徳太子が深く仏教を信仰したことにより仏殿が造営され、屋根を瓦で葺いたことが日本での瓦屋根の始まりとなった。以後庶民の家の屋根も瓦で葺かれるようになり、今日の瓦製造業の繁栄に至ることになった。このことにちなんで建てられたものである。現在でも付近には一時ほどの隆盛はないものの、瓦製造業が続けられている。

本遺跡の旧河床地点上層では、土師器類が多量に堆積した状態で出土している。奈良時代から平安時代中期にかけての土師器・須恵器・木器・瓦・獣骨・種子・木材が集積して発見された。8世紀代から10世紀代にかけて、長期間にわたるさまざまな遺物がみられたものの、土師器の坏・皿・蓋がその80%を占めていた。普通の集落跡での土師器の出土比率からして、甕が少なく坏・皿のほか蓋の出土が多いことが特徴的である。さらに、製品としては異状に歪んだ失敗作品と思われる坏が出土している点や焼成粘土塊が出土していることなどが指摘できる。これは、県教委での発掘地点での成果同様に、土師器の製作に関係する遺跡であることが推定できる。特に旧河床地点上層の遺物群は、破損品の廃棄場所と考えられ、馬骨や加工材、種子等の存在も、当時の残滓の廃棄場所としての性格を裏付けるものであろう。

しかし、使用痕跡を残し、墨書や漆の付着した土師器の存在や須恵器・木製品・紡錘車などの出土は、当時の一般的な生活の痕跡でもあり、土師器の製作に従事していた集団の生産に関わる部分と、日常の生活に関わる部分の二面を窺い知ることのできる遺跡である。

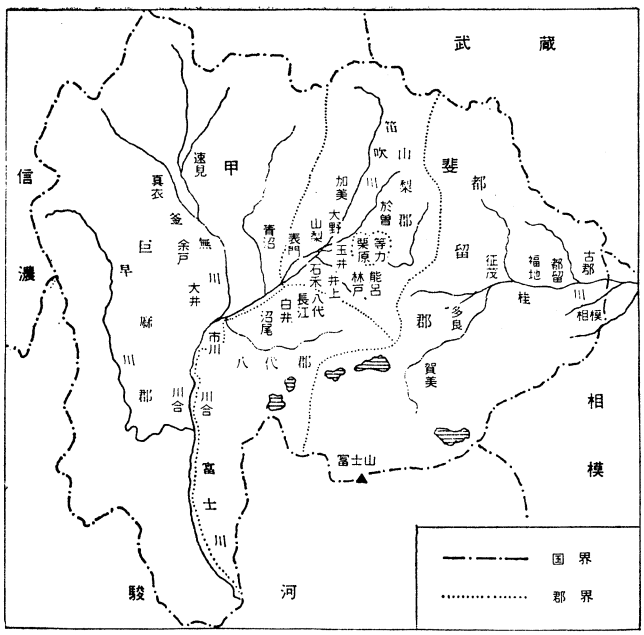
第3節　表門郷について

奈良・平安時代の甲斐国は、山梨・八代・巨摩・都留の四つの郡に分かれていた。「和名抄」などから山梨郡は、於曽・能呂・林戸・井上・玉井・石禾・表門・山梨・加美・大野の10郷が存在し、前5郷を山梨東郡、後5郷を山梨西郡と二分している。

「表門」は、「宇波止」と訓する。甲府市和戸町の和戸は、この遺称であると考えられている。「うわと」の発音が音便の変化から「わど」に転化したのするものである。表門郷の範囲は、現在の甲府市の東部から石和町北部にかけてが郷域であり、西は巨摩郡青沼郷、南東は山梨郡石禾郷、北東は山梨郡山梨郷に境を接していたと推測されている。

この和戸町に隣接する横根町の大坪遺跡で、「甲斐国山梨郡表門」の文字が刻書された土師器皿の発見によって、当地が山梨郡表門郷であることが立証された。この皿形の土師器は、その胎土の混在物や整形技法・法量などから当地で生産されたものである可能性が非常に高い。この土師器は、9世紀末から10世紀初頭の時期に製作されたもので、平安時代中期にあたる。本県内で国郡郷の地名が記された史料としては最古のものである。「和名抄」記載の郷名がその推定地の土中からそのまま出土した点で、文献と考古資料の一致したきわめて貴重な例である。

なお「表門郷」の地名は、建武五（1338）年「一蓮寺文書」の中に「表門郷四目木三段……」と記載された文書が残されていることから、南北朝の初期までは存続していたことが知られている。



和名抄甲斐国郡郷位置推定図（等力・栗原2郷は巨摩郡の飛地）（磯貝・飯田1973）

第4節　木製品について

旧十郎川河床地点上層は、適度な湿気と温度がほぼ一定に保たれ続けてきたために、通常の遺跡では腐って失なわれてしまう遺物が多量に検出された。特に植物遺体は、材や枝・葉・種子・果実・果皮など多種にわたっている。木製品としては、板・杭・皿・木簡等がある。23図上に示したものは、櫃の底板状の盤である。長軸に2個所、短軸に1個所ずつの桜皮の止め具のようなものが付いている。長軸38cm、短軸の現存長14.4cm最大の厚さ0.9cmを測るヒノキ製品である。この片面には、半円形に列点状の凹みがあり、使用時の痕跡かと思われる。2は、口径19.2cm、底径13.8cm、高さ1.5cmを測る木皿である。底部はやや上げ底状に中央部が凹んでいる。細かな年輪の入ったトネリコ製のものである。3は、長さ14cm、最大幅2.7cmの薄い板状の木簡である。頭部つけ根がややくびれており、一般的な木簡の形とは少々異なる。あるいは人形（ひとがた）かもしれないが、顔や手足を示す墨書や刻み等はみられない。ヒノキ製である。

参　考　文　献

雨宮正樹　1984　「高根町青木・東久保遺跡」『山梨考古』12

飯島　進・他　1974　『甲斐の古墳Ⅰ　甲府北東部に於ける積石塚・横穴式古墳の調査』

磯貝正義・飯田文弥　1973　『山梨県の歴史』

猪股喜彦　1984　「一宮町国分寺周辺遺跡の調査－松原遺跡－」『山梨考古』12

上野晴朗　1960　「甲斐国発見の墨書土器と陰刻文字」『甲斐史学』11

〃　1967　『甲州風土記』

菊島美夫　1975　「山梨県における晩期土師式土器編年試論」『甲斐考古』12の2

坂本美夫　1979　「山梨県に於ける晩期土師式土器編年の再検討」『甲斐考古』16の1

坂本美夫・他　1981　「山梨県における奈良時代土器の様相」『シンポジウム盤状坏』

〃　1983　「シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題（第Ⅱ版）」『神奈川考古』14

信藤祐仁　1984　「甲府市横根町大坪遺跡」『山梨考古』12

末木　健　1974　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－北巨摩郡小淵沢町地内』山梨県教育委員会

末木　健・菊島美夫・他　1976　『大坪』山梨県遺跡調査団

末木　健　1983　「山梨県における平安時代の遺跡について」『日本歴史』426

〃　〃　「山梨県下の墨書刻書土器」『甲斐路』49

谷口一夫・坂本美夫・他　1980　『朝気遺跡』甲府市教育委員会

多摩市遺跡調査会　1983　『東寺方遺跡』

中島正行　1949　「出土瓦による寺本一官寺址の新旧について上・中・下」『郷土研究』6～8

奈良泰史　1980　『堀の内原遺跡発掘調査報告書』都留市教育委員会

萩原三雄・秋山　敬　1981　「原始古代」『甲府の歴史と文化』　甲府市教育委員会

萩原三雄・末木　健　1983　『山梨の考古学』

堀内　真　1983　『古屋敷遺跡』富士吉田市教育委員会

山路恭之助　1983　『大小久保遺跡』須玉町教育委員会

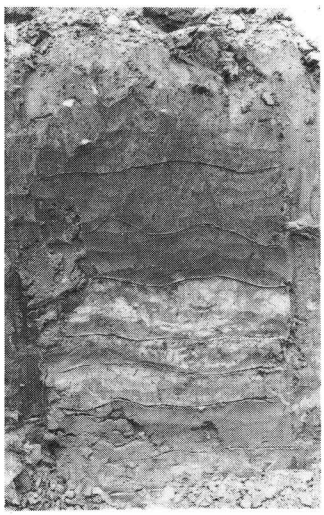
山本寿々雄・他　1974　『古代甲斐国の考古学調査』

山梨県考古学協会　1983　『山梨の遺跡』

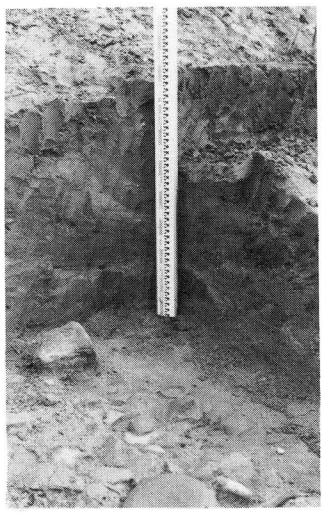
旧河床地点全景（北東方向より）

発　掘　調　査　風　景

発　掘　調　査　風　景

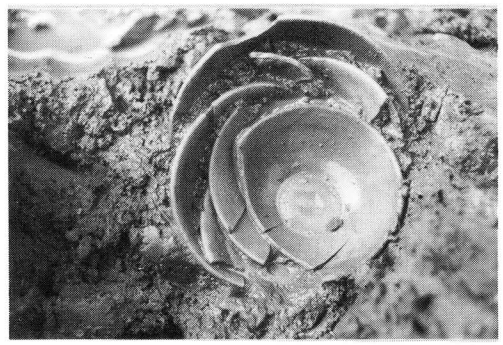


教習所地点土層

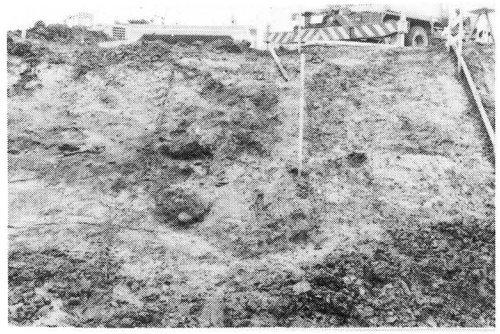


旧河床地点

教習所地点遺物出土状況



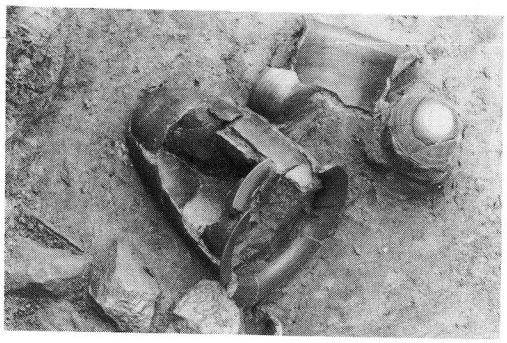
教習所地点遺物出土状況



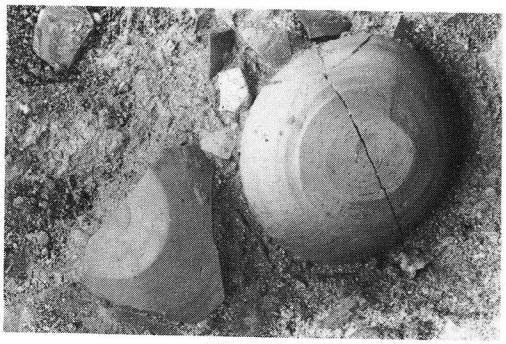
旧河床地点全景

旧河床地点下層遺物出土状況

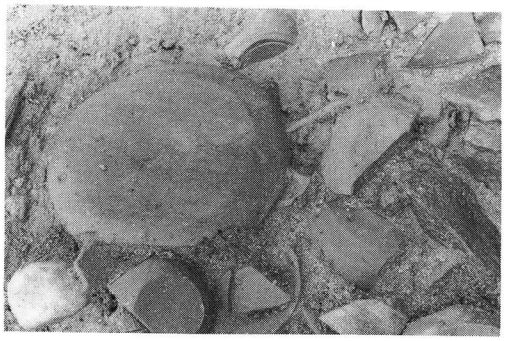
皿と角材



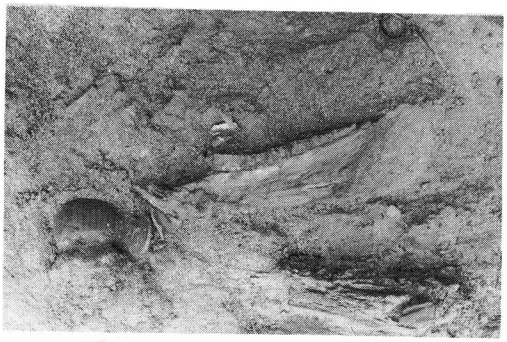
甕



皿



木皿



骨

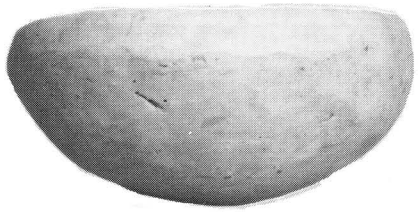
種子

遺物出土状態

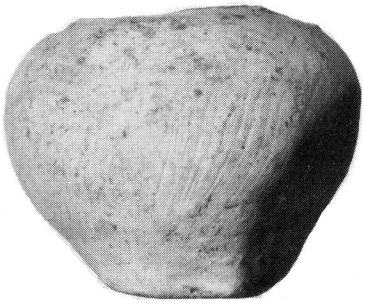
4－2　石鏃　4－1

6－1

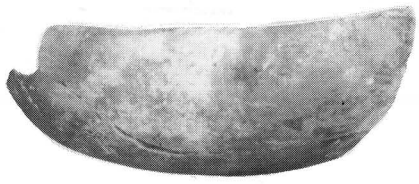
甕



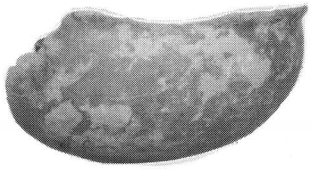
坏



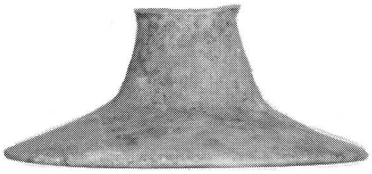
6－2　壺



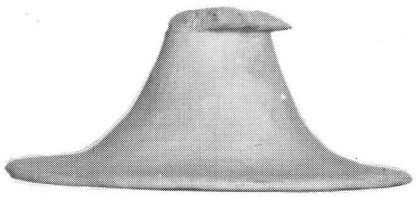
坏



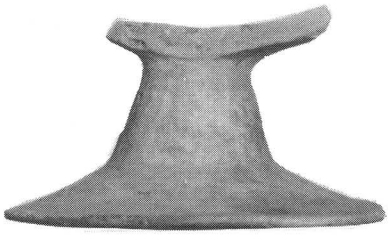
椀



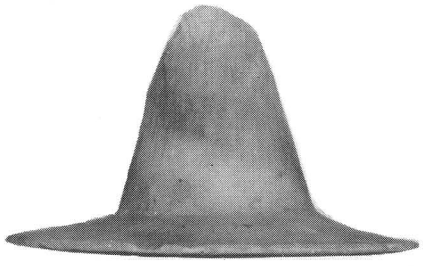
6－11　高　坏



6－12　高　坏

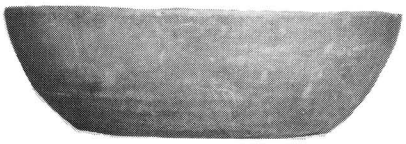


6－10　高　坏

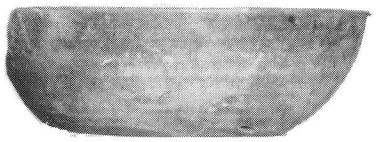


6－13　高　坏

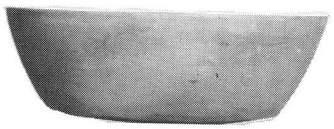
旧河床地点下層出土遺物



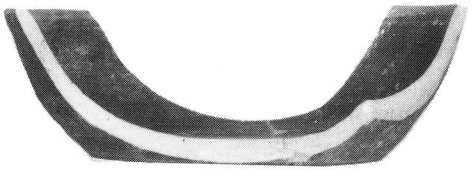
8 － 7



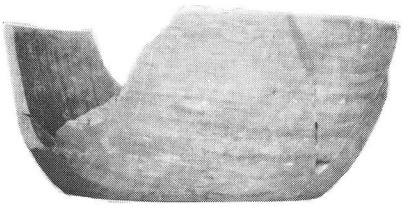
8 － 5



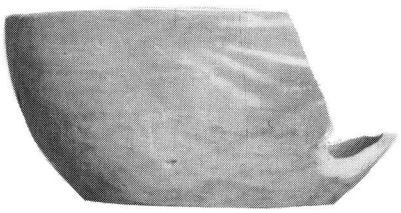
8 － 1



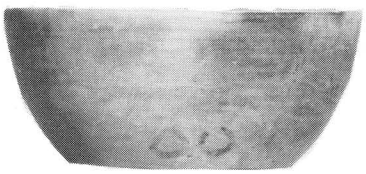
8 － 3



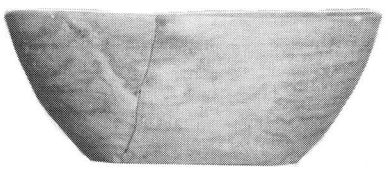
9 －16



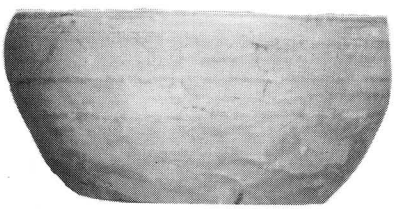
9 －14



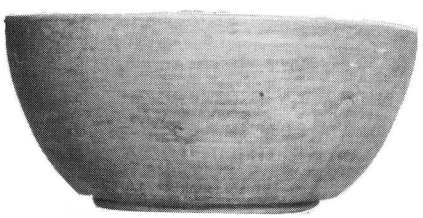
8 －12



8 －13

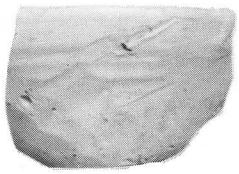


8 －11



9 －18

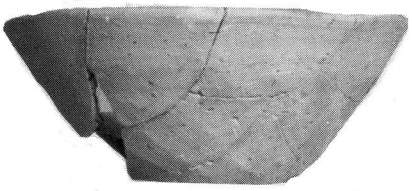
旧 河 床 地 点 出 土 坏 (1)



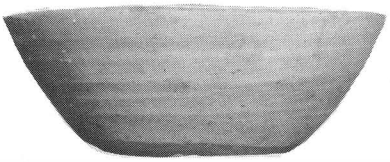
10－32

11－54

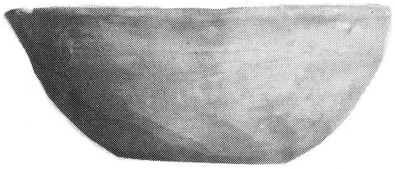
10－22



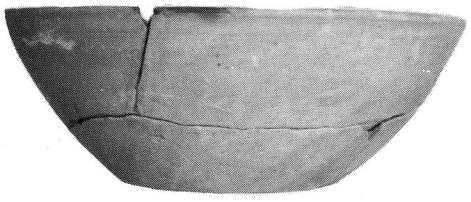
10－21



11－40

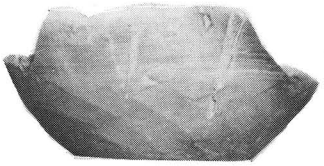


10－23

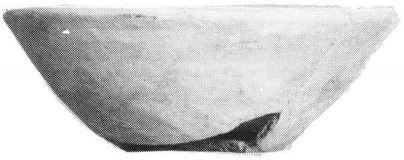


9 －17

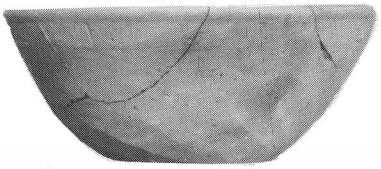
11－52



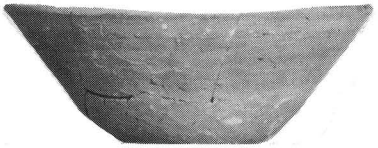
11－49



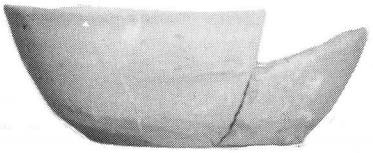
10－24



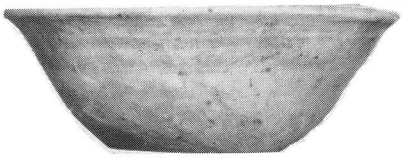
10－27



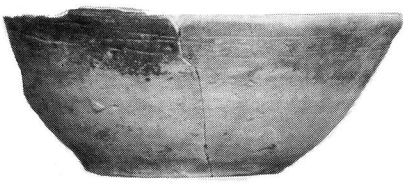
10－25



10－28

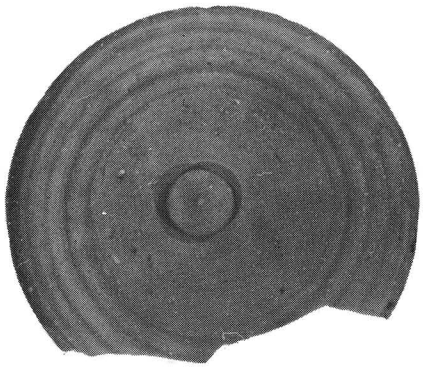


10－38

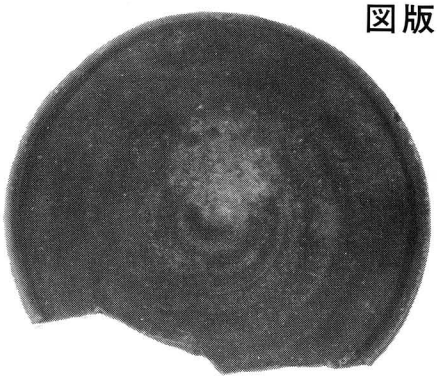


11－44

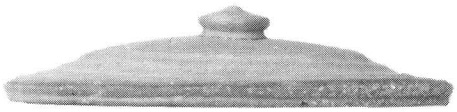
旧 河 床 地 点 出 土 坏 (2)



21－1

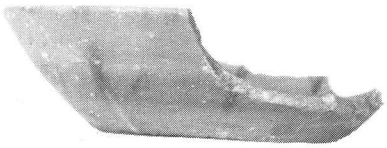


21－1



21－1

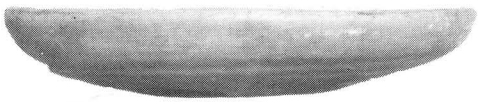
21－13



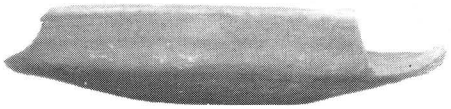
21－6

12－1

14－20



12－2



12－8

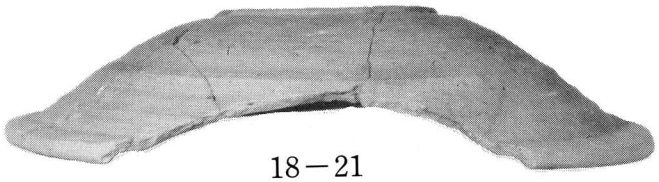
16－34

14－21

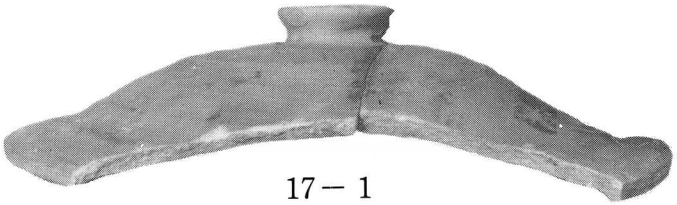
14－17

13－15

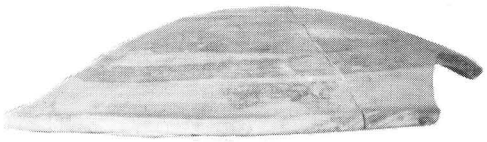
旧河床地点出土須恵器及び土師器皿



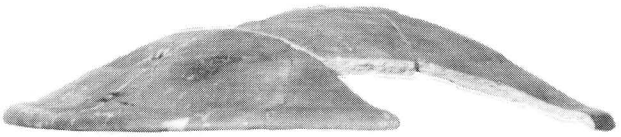
18－21



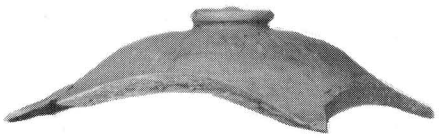
17－ 1



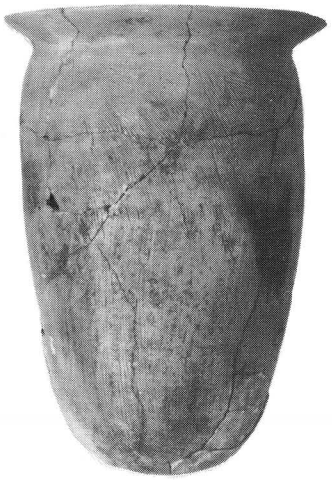
17－ 4



18－19

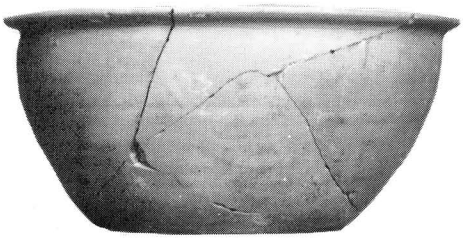


18－16



20－ 4

19－ 5



19－ 4

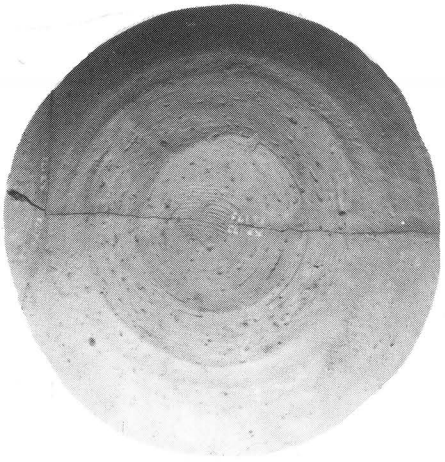
旧河床地点出土土師器

刻書土器

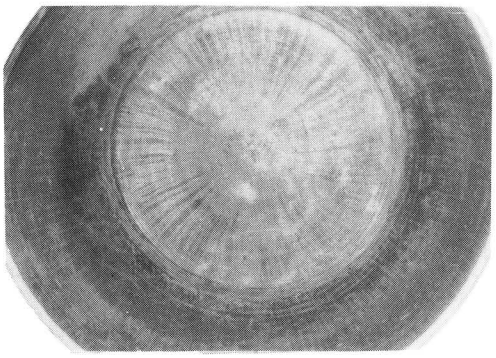
「甲斐国山梨郡表門」

「生」墨書

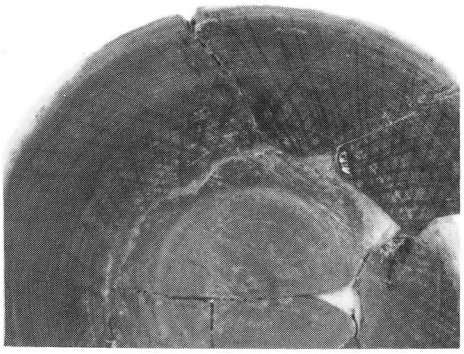
「十」墨書



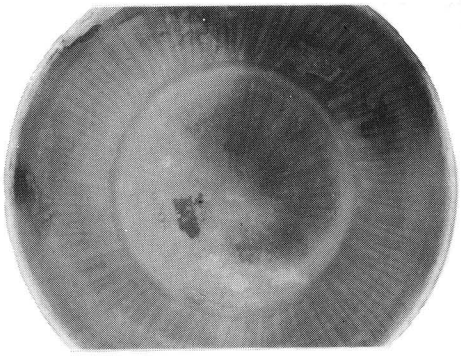
旧河床地点出土・墨書刻書・刻線等



9 －18

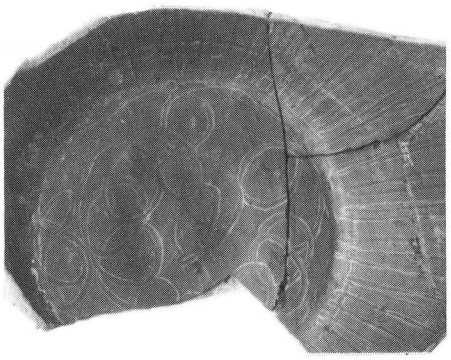


9 －17

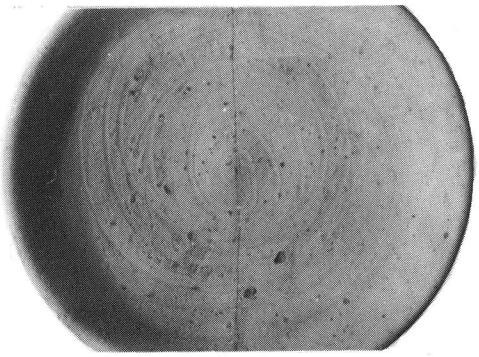


8 －12

11－48



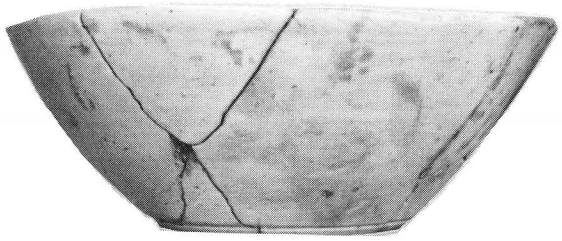
9 －19



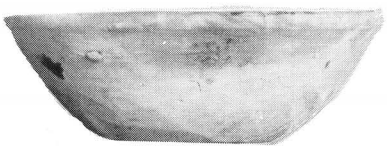
14－17

12－7

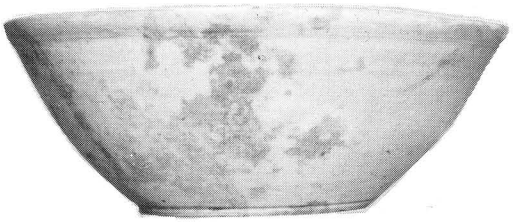
暗文のいろいろ



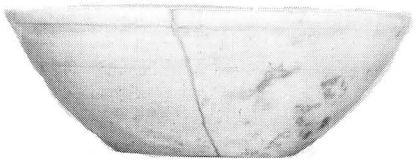
25－ 9



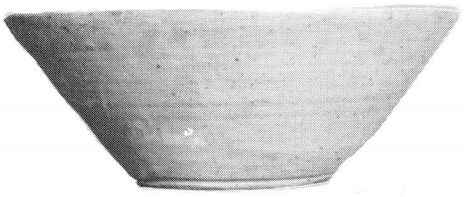
25－ 8



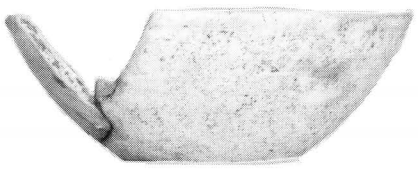
25－10



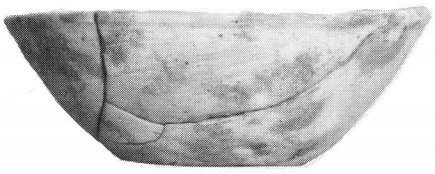
25－ 5



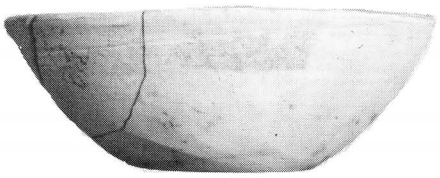
25－11



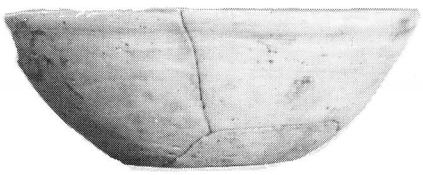
25－ 2



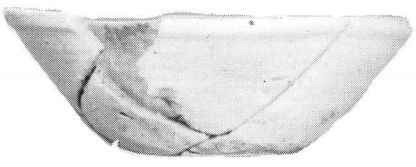
25－ 4



25－ 3



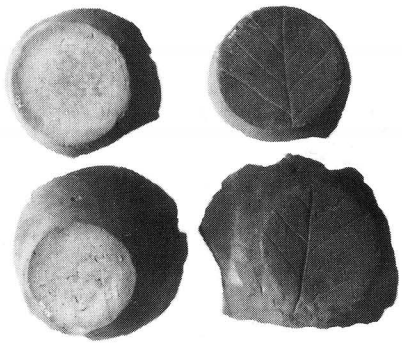
25－ 7



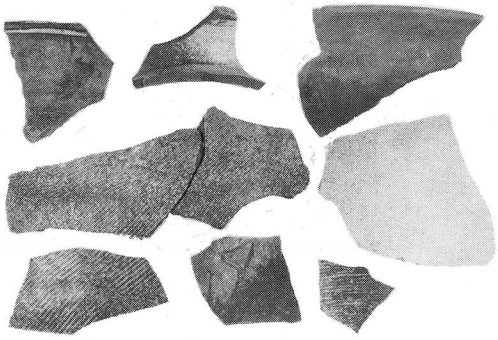
25－ 6

教 習 所 地 点 出 土 坏

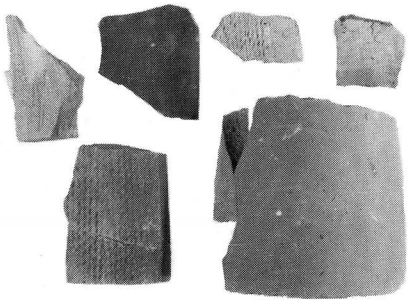
甕



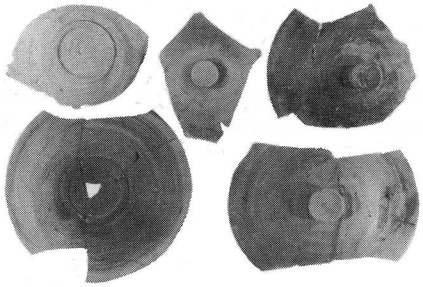
甕　底　部



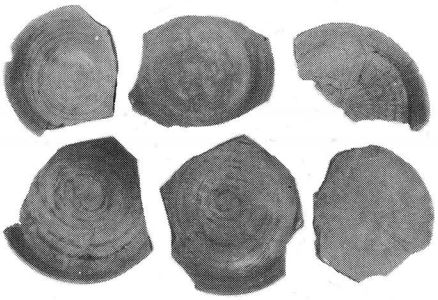
須　恵　器



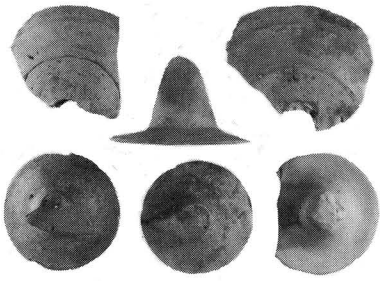
瓦



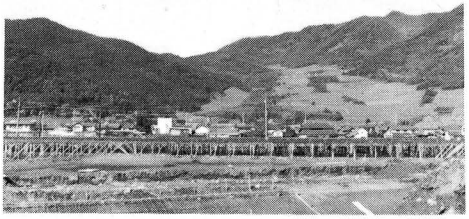
蓋



皿

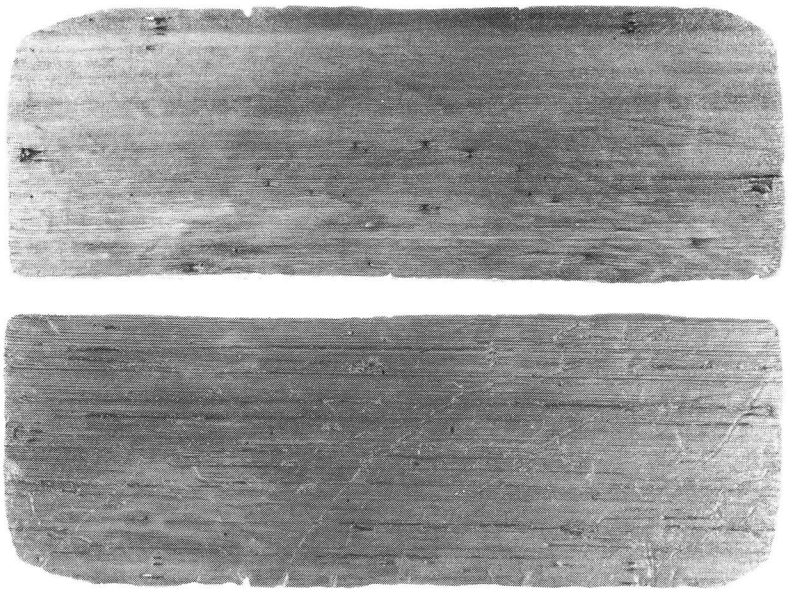


高　坏



調査区からみた横根積石塚のある扇状地

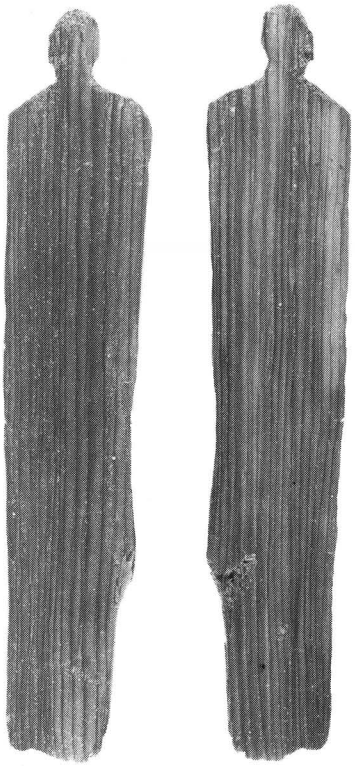
出　土　遺　物　等



板

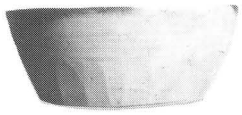
裏

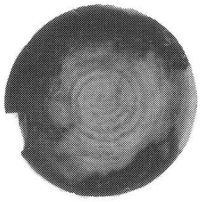
表



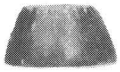
木　簡

木　皿　　旧河床地点出土木製品

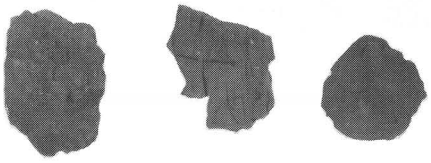




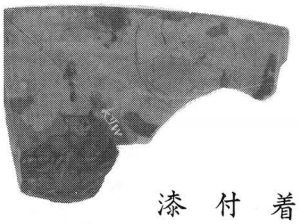
手捏ね土器



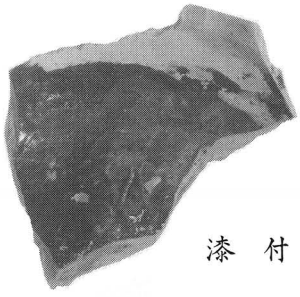
紡　錘　車



焼成粘土塊

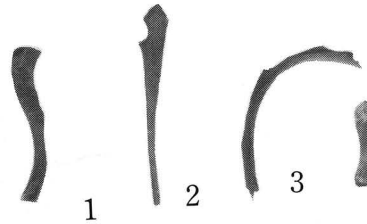


漆　付　着

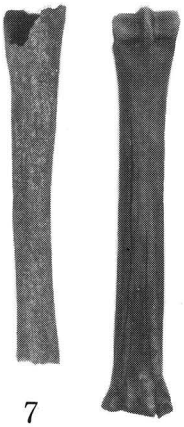


漆　付　着

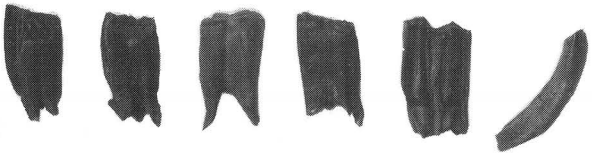
漆　付　着



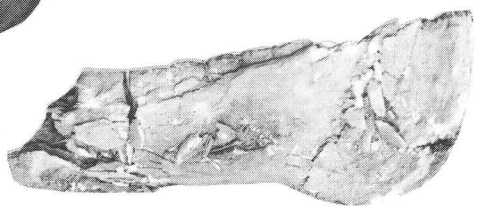
1　2　3　4　5　6



7　8

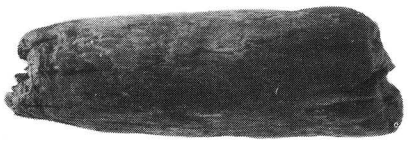


9　10　11　12　13　14

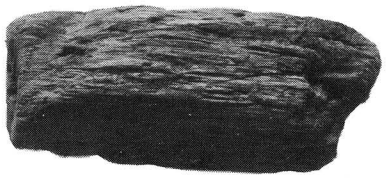


下　顎　骨　15

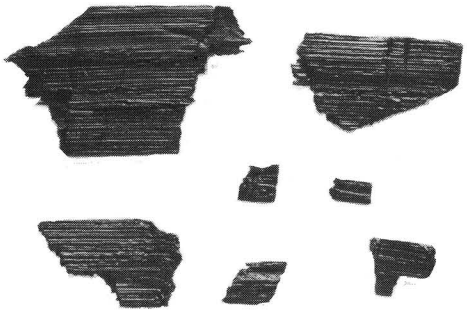
大坪遺跡出土植物遺体(1)木材と種子



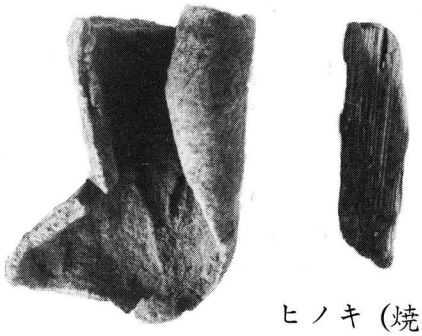
コメツガ材



コナラ材

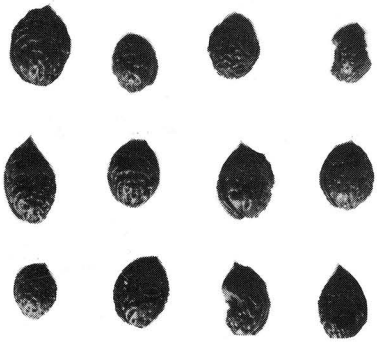


ツガ材

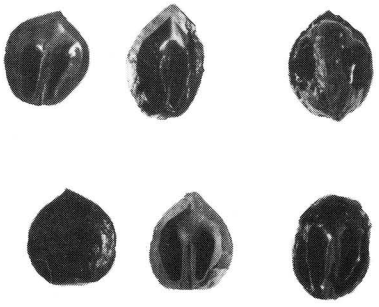


ヒノキ(焼痕)

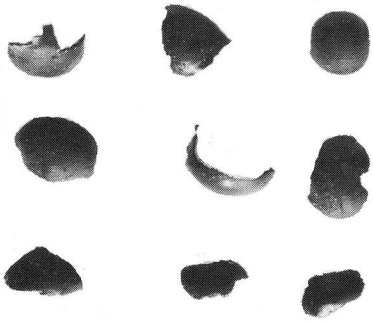
ヒョウタンもしくはトウガンの果皮



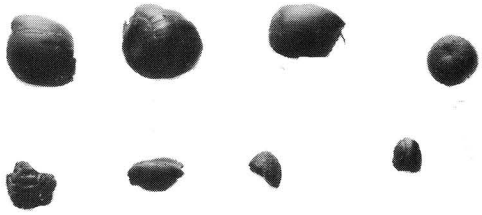
モモ種子



オニグルミ

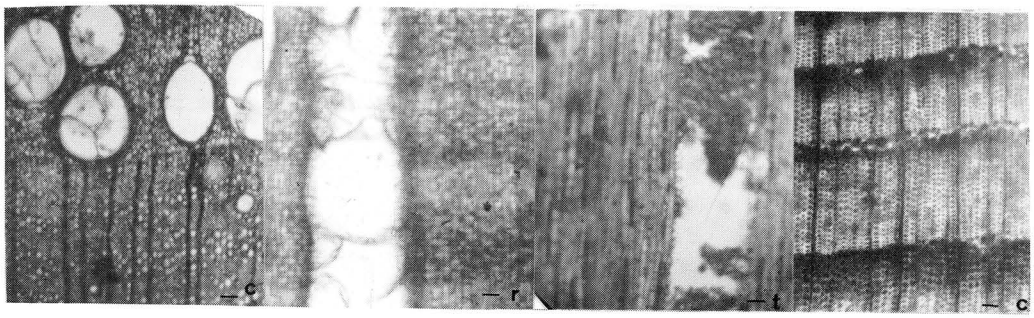


クリ・アベマキの堅果

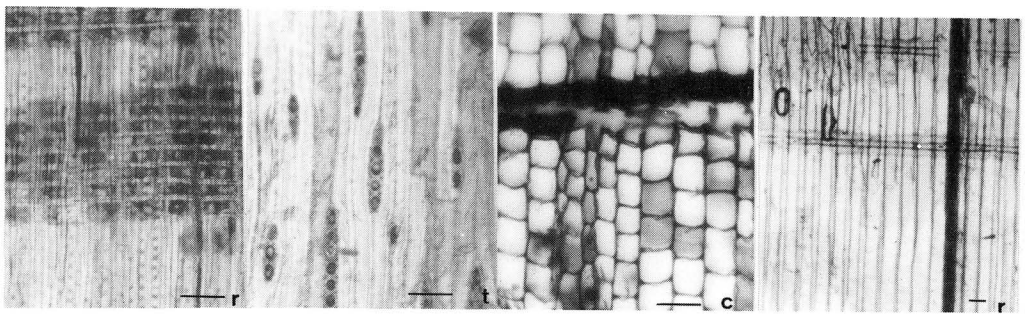


ミズナラ・ナラガシワの堅果

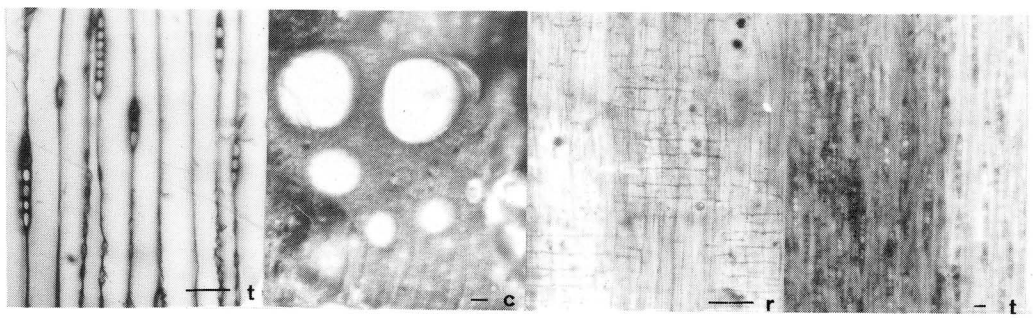
図版 16



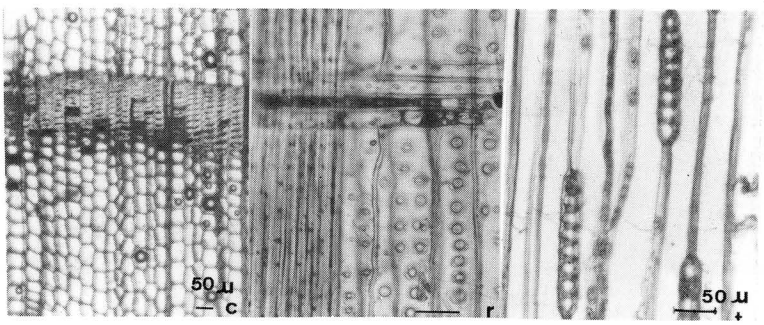
コ ナ ラ　*Quercus serrata* THUNBERG　コ メ ツ ガ



Tsuga diversifolia MASTERS　ヒ ノ キ　*Chamaecyparis obtusa* ENDLICHER



ク リ　*Castanea crenata* SIEBOLD et ZUCCARINI



ツ ガ　*Tsuga sieboldii* CARRIÈRE

写真下部の横線は50ミクロン

c：横 断 面
r：放 射 断 面
t：接 線 断 面

甲府市文化財調査報告 1

山梨県甲府市

大　坪　遺　跡

十郎川河川改修工事に伴なう発掘調査報告書

昭和59年 3 月15日　発行
編集・発行　甲府市教育委員会
印　　刷　依田印刷社